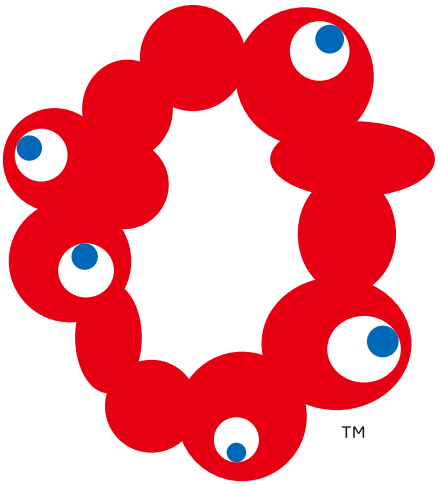
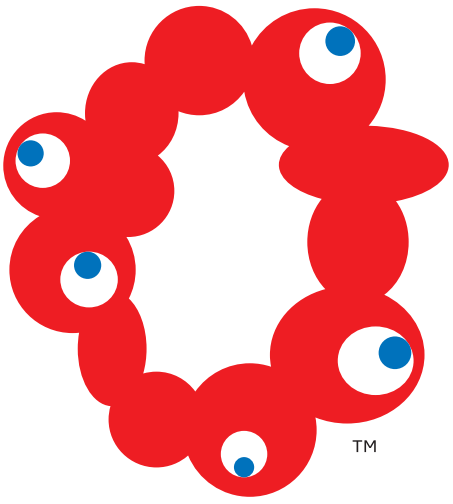
DESIGNING FUTURE SOCIETY FOR OUR LIVES

いのち輝く未来社会のデザイン



2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）
基本計画



2025年日本国際博覧会
（略称「大阪・関西万博」）
基本計画

2020年12月

公益社団法人2025年日本国際博覧会協会





目次

006　はじめに

007　第1章 全体概要

1.1 開催概要 …… 008

017　第2章 事業構成

2.1 事業構成 …… 018

027　第3章 主催者企画事業

3.1 テーマ事業 …… 028

3.2 催事 …… 039

3.3 「TEAM EXPO 2025」プログラム …… 042

045　第4章 参加計画

4.1 公式参加 …… 046

4.2 企業・団体・自治体・市民団体等の参加 …… 047

051　第5章 会場計画

5.1 会場デザインコンセプト …… 052

5.2 会場構成 …… 058

5.3 施設計画 …… 060

5.4 会場整備 …… 068

5.5 基盤設備 …… 069

5.6 会場整備スケジュール …… 070

071 第6章 運営計画
6.1 運営計画の構成 072
6.2 入場制度 073
6.3 営業活動 078
6.4 来場者サービス 080
6.5 会場管理 081
6.6 持続可能性に配慮した運営 085

087 第7章 情報通信計画
7.1 情報通信計画の基本方針 088
7.2 情報セキュリティ方針 091

093 第8章 輸送計画
8.1 基本方針 094

097 第9章 広報・プロモーション計画
9.1 広報・プロモーションの目的 098
9.2 広報活動 101
9.3 プロモーション活動 102

105 第10章 資金計画
10.1 資金計画 106

107 第11章 事業推進計画
11.1 リスク管理 108
11.2 推進体制 109
11.3 スケジュール 110

はじめに

本書は万博の開催に必要な事業とその方針について策定した全体の計画である。

この基本計画を発行した2020年は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るい、人類は未曽有の危機に直面することとなった。世界中で多くの命が失われ、経済も激しいダメージを受け、先行きの見えない不安感が世界を覆い包んだ。

世界が等しく経験した災禍により、国家や人々の交流の分断、「いのち」を取り巻く環境や様々な社会制度の再構築、価値観や生活様式の変化等、新たな課題にも私たちは直面することとなった。しかしながら、こうした状況だからこそ、世界の知恵を結集し、速やかに解決へと導くことが求められている。

大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」について考え、行動することは、まさにこの時代を生きる我々に課せられた使命となった。2030年をゴールとする持続可能な開発目標（SDGs）[1]への取組は、世界共通の課題の解決を目指すものであり、本万博を開催する意義である。

SDGsの本質は、いのちを起点に様々な課題を紡いでいく試みである。これは、一人一人のいのちが輝くとともに、世界が、自然界が持続可能であることを望み、未来を共に創る営みである。

1970年、アジア初の国際博覧会（万博）開催となった日本万国博覧会（大阪万博）では、第2次世界大戦の焼け跡から高度経済成長を成し遂げたことを背景に、当時の最先端技術の展示を行い、技術がもたらす豊かな明日を示し、来場者に強烈なインパクトを与えた。その後の「自然と人間との共生」をテーマにした1990年国際花と緑の博覧会、「自然の叡智」をテーマにした2005年日本国際博覧会（愛・地球博）等、日本で開催した国際博覧会はその時代の課題に向き合い、世界と共に解決を目指してきた。

2025年大阪・関西万博は、この時代に、「いのち」をテーマに掲げる万博として、世界が一つの「場」に集う機会となる。本万博を契機として世界の多様な価値観が交流しあい、新たなつながりや創造を促進していく。世界的な危機を乗り越え、一人一人のいのちを守り、いのちの在り方、生き方を見つめ直すことで、未来への希望を世界に示す万博となることを目指す。

1　2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成される。SDGsはSustainable Development Goalsの略。

1

第1章 全体概要

1.1 開催概要

名称

2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）

テーマ

いのち輝く未来社会のデザイン
（Designing Future Society for Our Lives）

サブテーマ

Saving Lives（いのちを救う）
Empowering Lives（いのちに力を与える）
Connecting Lives（いのちをつなぐ）

コンセプト

People's Living Lab（未来社会の実験場）

会場

夢洲（ゆめしま）（大阪市臨海部）

開催期間

2025年4月13日（日曜日）～10月13日（月曜日）

来場者数（想定）

約2,820万人

開催の意義

いのち輝く未来社会へ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界に大きな影響を与えた。人々は日常の生活の中でいのちに向き合いながら、自らの行動に選択を求められている。

大阪・関西万博は、COVID-19を乗り越えた先の、新たな時代に向けた国家プロジェクトである。この時代に開催される万博として「いのち」という原点に立ち戻り、自らと他者のいのちを意識し、そして自然界の中で生かされる様々ないのちに向き合い、世界が持続する未来を模索する場となる。

転換期ともなるこの時代において、万博という場で世界が一つとなることに意義があり、いのち輝く未来社会のありようを共有することは2025年以後の世界の新たな一歩となる。

SDGs達成・SDGs+beyondへの飛躍の機会

「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマの下で行われる一連の活動は、「誰一人取り残さない」という誓いに裏打ちされた持続可能な方法で、多様性と包摂性のある社会を実現することを究極の目的とする、国際連合（国連）のSDGsと合致するものである。

大阪・関西万博が開催される2025年は、SDGsの目標年である2030年の5年前であり、SDGs達成に向けたこれまでの進捗状況を確認し、その達成に向けた取組を加速させる絶好の機会となる。同時に、中長期的な視野を持って未来社会を考えることを通じて、2030年のSDGs達成にとどまらず、その先（+beyond）に向けた姿が示されることも期待される。

2025年に日本において大阪・関西万博を開催することは、SDGs達成・SDGs+beyondへの飛躍の機会となる。

Society5.0実現に向けた実証の機会

日本国政府はSociety5.0を国の成長戦略として位置づけており、官民を挙げて、その実現に向けて取り組んでいる。Society5.0とは、日本の強みとリソースを最大限に活用して、誰もが活躍でき、人口減少、高齢化、エネルギー・環境制約等、様々な社会課題を解決できる、日本ならではの持続可能でインクルーシブな社会経済システムをいう。具体的には、IoT（モノのインターネット）[2]、AI（人工知能）、ロボティクス、ビッグデータ等の先端技術を活用して様々な世界的な課題を解決する超スマート社会の実現を目指す日本の国家的な取組である。

大阪・関西万博において、会場全体を未来社会を先取りした超スマート会場とし、新たな技術、サービス及びシステムの社会実装に向けたチャレンジを行うことは、Society5.0実現に向けた実証の機会となる。

2 Internet of Thingsの略。機器が通信機能を備え、インターネット等のネットワークに接続して動作する仕組み。

日本の飛躍の契機に

大阪・関西万博を契機として、世界の多様な文化、価値観が交流しあい、新たなつながり、創造が促進されていく。また、本万博は文化、歴史等も含め、日本の魅力を再発見する機会ともなり、「観光立国」を目指して、より付加価値の高い観光の実現を目指すきっかけとなる。さらには、万博会場において、DX（デジタルトランスフォーメーション）[3]による社会変革の新たな形や、地球環境問題への新たな挑戦の形を世界に示していく。本万博は、経済、社会、文化等あらゆる面において、大阪・関西のみならず、日本全体にとって更なる飛躍の契機となる。

大阪・関西の特徴

大阪・関西地域は、古代国家の基礎が築かれた地であり、世界遺産、国宝、重要文化財等の歴史観光資源が多く残り、神社仏閣、歴史的建造物、伝統芸能、和食等の幅広い文化資源を有する地域である。

さらに、ユネスコ無形文化遺産である人形浄瑠璃文楽や、上方歌舞伎、能といった伝統芸能、上方落語や漫才といった大衆演芸をはじめとした「笑い」のエリアとして日本中に知られている。

また、大阪は江戸時代より天下の台所として知られ、「食いだおれ」の町とも言われるほど様々な食が発達している。野球やサッカーをはじめとしたスポーツも大阪・関西地域を代表する特徴である。

産業の特徴をみると、関西は、環境・ライフサイエンス・ものづくりの企業・研究施設、伝統工芸品と匠の技等、幅広い分野の集積があり、Society5.0につながる高い技術等、最先端の技術力で日本を牽引する地域である。また、世界初の先物取引等、世の中にないもの、新しいものをつくりだそうという気持ちが強い地域である。

世界・アジアとのつながりをみると、国際貿易拠点として、大量の貨物の取扱いや大型クルーズ船が入港できる空港・港湾により、アジアの中核としての役割を担っている。地形は、山間部から平野部まで変化に富み、日本特有の四季折々の豊かな自然に恵まれている。こうした自然や文化・歴史により、国内はもとより、外国人観光客にとっても、大阪・関西地域は東京と並ぶゴールデンルートとして人気の旅行先になっている。

このように大阪・関西地域は、それぞれの地域の歴史、文化、伝統及び気風を背景に、個性的且つ多様でありつつ、確かな技をベースに発展してきており、日本の経済・産業・文化にとっての重要な地域となっている。

3 Digital Transformationの略。将来の成長等のために、新たなデジタル技術を活用して新たなビジネスモデルを創出・柔軟に改変すること。

テーマ

「いのち輝く未来社会のデザイン」（Designing Future Society for Our Lives）

「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマは、人間一人一人が、自らの望む生き方を考え、それぞれの可能性を最大限に発揮できるようにするとともに、こうした生き方を支える持続可能な社会を、国際社会が共創していくことを推し進めるものである。

言い換えれば、大阪・関西万博は、格差や対立の拡大といった新たな社会課題や、AIやバイオテクノロジー等の科学技術の発展、その結果としての長寿命化といった変化に直面する中で、参加者一人一人に対し、自らにとって「幸福な生き方とは何か」を正面から問う、初めての万博になる。

近年、人々の価値観や生き方がますます多様化するとともに、技術革新によって誰もがこれまで想像しえなかった量の情報にアクセスし、やりとりを行うことが可能となった。このような進展を踏まえ、大阪・関西万博では、健康・医療をはじめ、カーボンニュートラル[4]やデジタル化といった取組を体現していくとともに、世界の叡智とベストプラクティスを大阪・関西地域に集約し、多様な価値観を踏まえた上での諸課題の解決策を提示していく。

4　社会の構成員が、自らの責任と定めることが一般に合理的と認められる範囲の温室効果ガスの排出量を認識し、主体的にこれを削減する努力を行うとともに、削減が困難な部分の排出量について、クレジットを購入すること又はほかの場所で排出削減・吸収を実現するプロジェクトや活動を実施すること等により、その排出量の全部を埋め合わせた状態をいう。

サブテーマ

大阪・関西万博のテーマである「いのち」を考える軸として、我々は、「Saving Lives（いのちを救う）」、「Empowering Lives（いのちに力を与える）」、「Connecting Lives（いのちをつなぐ）」という3つのサブテーマを設定する。

なお、サブテーマにおける“Lives”は「生活（daily life）」や「人生（life as a whole）」の意味だけではなく、とりわけ「いのち・命（life）」に着目した概念である。

日本では「生きとし生けるもの」のみならず「路傍の石」でさえも「いのち」が宿ると捉える文化が古くから存在する。こうした背景から、テーマである「いのち」の対象を人間だけではなく、我々を取り巻く多様な生物や自然、さらにはより広く捉える。

Saving Lives（いのちを救う）

「Saving Lives（いのちを救う）」は、「いのち」を守る、救うことに焦点を当てるものである。「いのちを救う」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、公衆衛生の改善による感染症対策、防災・減災の取組による安全の確保、自然との共生等が挙げられる。

Empowering Lives（いのちに力を与える）

「Empowering Lives（いのちに力を与える）」は、「生活」を豊かにする、可能性を広げることに焦点を当てるものである。「いのちに力を与える」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、情報通信技術（ICT）を活用した質の高い遠隔教育の提供、スポーツや食を通じた健康寿命の延伸、AIやロボティクスの活用による人間の可能性の拡張等が挙げられる。

Connecting Lives（いのちをつなぐ）

「Connecting Lives（いのちをつなぐ）」は、一人一人がつながり、コミュニティを形成する、社会を豊かにすることに焦点を当てるものである。「いのちをつなぐ」から想定される具体的なキーワードとしては、例えば、パートナーシップ・共創の力、ICTによるコミュニケーションの進化、データ社会の在り方等が挙げられる。

コンセプト

People’s Living Lab（未来社会の実験場）

大阪・関西万博のコンセプトは「People’s Living Lab（未来社会の実験場）」である。これは、テーマを実現するアプローチであり、万博のスタイルをより実践的な行動の場へと進化させることを狙うため、本万博で行われる事業のガイドラインの役割を果たす。本万博の会期前から多様な参加者がそれぞれの立場からの取組（例えば、健康・医療、カーボンニュートラル、デジタルをテーマにしたもの等）を持ち寄り、SDGs達成に資するチャレンジを会場内外で行い、未来社会をただ考えるだけでなく、行動することによってリアルに描き出そうという試みが、本万博の最大の特徴と言える。万博会場を新たな技術やシステムを実証する場と位置づけ、多様なプレイヤーによるイノベーションを誘発し、それらを社会実装していくための巨大な装置としていく。

会場

夢洲（ゆめしま）（大阪市臨海部）

大阪・関西万博の会場は、夢洲である。夢洲は、大阪市内の臨海部に位置する人工島であり、来場者は瀬戸内海の美しい景観に接することができる。世界とつながる海と空に囲まれた万博として、ロケーションを活かした企画や発信を行っていく。

会場面積は155haで、会場中心部にパビリオンエリアを設け、南側には水面、西側には緑地を配置した会場とする。





会場配置計画

（2020年12月時点）

色凡例

- A 企 タイプA（国・民間企業）
- B 国 タイプB（国・国際機関）
- C タイプC
- テ テーマ館
- 営 営業施設
- 催 日本館、催事施設等
- サービス/管理施設
- 休憩所、トイレ
- 大屋根（リング）
- 水盤類
- 空地、緑地

※ 今後の調整状況により、現在の配置計画については、変更が生じうる。

0m 20m 100m 200m 500m 1km


夢洲駅（仮称）
営業
自治体等
（大阪館含む）
熱供給施設2
ゲート施設
エントランス広場
企業1
A49
B7
A50
東エントランス
大屋根
（リング）
企業2
企業3
企業4
企業5
営業
ゲート施設
B13
B11
B12
B10
A16
A4
日本館
大催事場
管理施設
小催事場
営業
庭園
迎賓館
H
管理施設
VIP・サービス
ゲート施設
供給処理施設

レガシーの継承

大阪・関西万博は、後述の事業構成に示すとおり、「世界との共創」、「テーマ実践」及び「未来社会ショーケース」を万博会場内外、また会期前から実践していく。

これらを通じて、来場者や参加企業・団体が、後の社会に根付く新たな技術、サービス及びシステムに触れること、また、SDGs達成やSDGs+beyondに向けて自らが取り組むことにより、それぞれの考え方に変化が起こり、会期後の行動変容に繋がっていく。このように、大阪・関西万博がてことなり、その理念・成果をレガシーとして後世に継承していくことも本万博の開催意義の一つである。

また、主催者（2025年日本国際博覧会協会）は今後、大阪・関西万博の計画を具体化していくにあたり、多様なバックグラウンドを持つ人から広く知恵を集めつつ、準備段階から多様な主体による共創を実現していく。そのため、年齢、性別、国籍等様々な観点から多様性のある推進体制を構築していく。こうした未来社会を担う次世代の才能の飛躍の機会となることも、本万博のレガシーの一つである。

2

第2章 事業構成

2.1 事業構成

大阪・関西万博では、万博の目的であるテーマの実現に向けて、People's Living Lab（未来社会の実験場）というコンセプトのもと、「世界との共創」「テーマ実践」「未来社会ショーケース」の3つを実施する。本万博で行う全ての事業は、テーマを実現するための手段として明確な役割を持つものであり、目標の達成を通して万博の開催意義に貢献するものである。

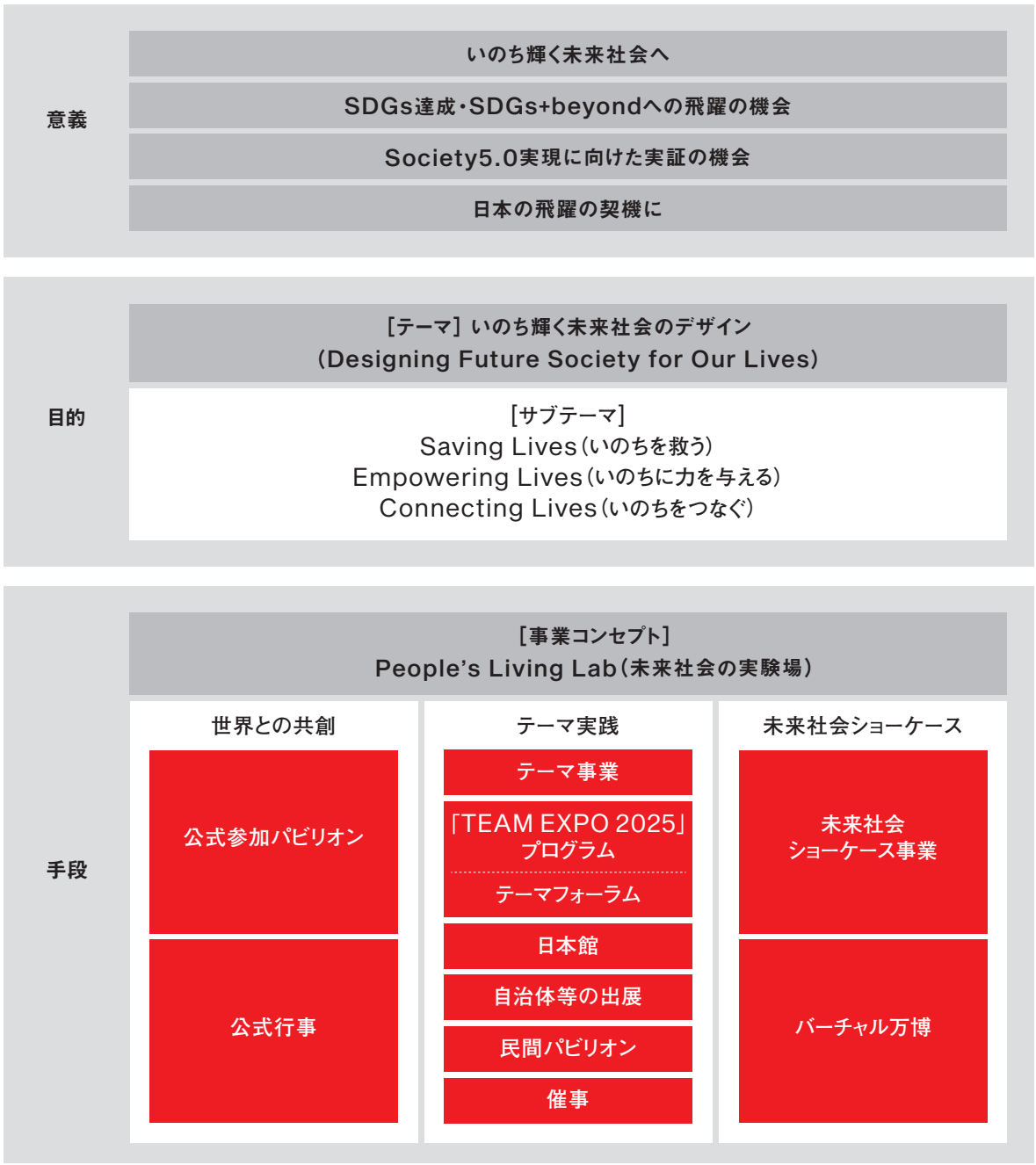


図　大阪・関西万博の事業構成

世界との共創

世界との共創は、大阪・関西万博の3つのサブテーマを通じて、テーマの実現を目指す。世界各国の公式参加者（参加国や国際機関）が、それぞれの立場からSDGs達成に向けた優れた取組を持ち寄り、会場全体でSDGsが達成された未来社会の姿を描く。

公式参加パビリオン

サブテーマ（「Saving Lives（いのちを救う）」「Empowering Lives（いのちに力を与える）」「Connecting Lives（いのちをつなぐ）」）に対応する形で会場全体に3つのゾーンを設定し、公式参加パビリオンを配置する。

公式参加者は、「いのち」について各国が展示するトピックスを設定する際の視座として、サブテーマである3つのLivesから1つ以上を選択、さらに、SDGsの掲げる17の目標のいずれか1つ以上に取り組むこととする。

●公式参加パビリオンのテーマ展開トピック例

サブテーマ	目的	潜在的なトピック		SDGs 17のゴール
		個人の取組、自分自身の意識改革、習慣、啓発による気づき	グループ、コミュニティ、企業、政府、国、経済・社会・環境システム等による取組	
Saving Lives（いのちを救う）	「いのち」を守る、救う	生活の中の健康、健康寿命の延伸、心（精神）の健康、季節と衣食住、食と生活	ライフサイエンス（最先端医療技術等の医療の発達）、労働環境の改善、貧困問題の解決、児童死亡率の低減、人権問題の解決（人身売買、児童婚）、健康と福祉、防災・減災、自然との共生・環境の保護、農業と食料生産、公衆衛生の改善、水源確保・水を届ける、再生エネルギー・新エネルギー、マイクロファイナンス、動物愛護	
Empowering Lives（いのちに力を与える）	「生活」を豊かにする、可能性を広げる	自己実現、自己表現、季節を感じる生活、ファッション、道徳・マナー、笑い、観光・探検・旅行、文化・文学・芸術・哲学・音楽、スポーツ、学び・遊び、瞑想・禅・マインドフルネス・祈り、AI・ロボット	遠隔教育の提供、人間の可能性の拡張、ボランティア活動、市民参加、寄付・募金、多様なライフ・ワークスタイル、産業高度化（AI活用等）、エンジェル投資、起業家精神、フロンティアへの挑戦（海洋・宇宙・深海・地底等）、食の未来（新たな食材、昆虫食等）	
Connecting Lives（いのちをつなぐ）	一人一人がつながり、コミュニティを形成する、社会を豊かにする	デジタル活用、地球環境を意識した行動、気候変動への適応、信仰、出会い、多様さや異文化理解の促進	ネット・コミュニティ、オンライン・プラットフォーム、パートナーシップ・共創の力、新たなファイナンス（クラウド・ファンディング等）、未来の産業、サーキュラーエコノミー、ソーシャルインクルージョン、伝統技術、ビッグデータの活用、スーパーシティ、スマートシティ、産官学のパートナーシップ	

公式行事

公式行事とは、大阪・関西万博に参加する多くの国や国際機関等と、国内外の賓客を招いて行う式典等のプログラムのことを指す。

開会式や閉会式、参加国のナショナルデー式典や国際機関のスペシャルデー式典を通じて、また、各国・各機関の特色ある催事も組み合わせ、万博の目的であるテーマの共有と実現を図る。

開会式

大阪・関西万博の開幕を祝う式典

開幕前日の2025年4月12日（土）を予定

ナショナルデー・スペシャルデー式典

ナショナルデーは参加国から、スペシャルデーは国際機関から、賓客を招いて行う式典

各国・機関の特色ある催事も組み合わせて、会期中連日開催

閉会式

大阪・関西万博の閉幕を祝う式典

閉幕日の2025年10月13日（月）を予定

テーマ実践

テーマ実践は、「いのち輝く未来社会」を大阪・関西万博の会場に描き出すことでテーマの実現を目指す。主催者が中心となり、様々な参加者と共創し事業を企画し、企業やNGO/NPO等、行政と共に、テーマが実現された未来社会の姿を会場内に創り出す。

テーマ事業

テーマ事業は、大阪・関西万博のテーマに掲げる「いのち輝く未来社会」の姿を立体的に描き出すために、主催者と協賛企業等が連携して行う事業である。テーマ事業は以下の8つの事業で構成する。

いのちを知る
生命系全体の中にある私たちの
いのちの在り方を確認する。

いのちを育む
宇宙・海洋・大地に宿るあらゆる
いのちのつながりを感じ、
共に守り育てる。

いのちを守る
危機に瀕し、
人類は「分断」を経験する。
「わたし」の中の「あなた」を認める
いとなみの行方に、多様ないのちが、
それぞれに、護られてゆく未来を描く。

いのちをつむぐ
自然と文化、
人と人とを紡ぐ「食べる」という
行為の価値を考え、
日本の食文化の根幹にある
「いただきます」という精神を発信する。

いのちを拡げる
新たな科学技術で
人や生物の機能や能力を拡張し、
いのちを広げる可能性を探求する。

いのちを高める
遊びや学び、スポーツや芸術を通して、
生きる喜びや楽しさを感じ、
ともにいのちを高めていく
共創の場を創出する。

いのちを磨く
自然と人工物、
フィジカルとバーチャルの融和により、
自然と調和する芸術の形を追求し、
新たな未来の輝きを求める。

いのちを響き合わせる
個性あるいのちといのちを響き合わせ、
「共鳴するいのち」を共に体験する
中で、一人ひとりが輝くことのできる
世界の模式図を描く。

「TEAM EXPO 2025」プログラム

会期前より2025年に向けて、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現し、SDGsの達成に貢献するために、多様な参加者が主体となり、理想としたい未来社会を共に創り上げることを目指す取組である「TEAM EXPO 2025」プログラムを推進する。

このプログラムでは、国内外において、大阪・関西万博のテーマの実現に向けた様々なアイデアやノウハウを持ったチームによる主体的な取組を募集・支援していくとともに、テーマを軸として多くの実践者や有識者が議論を行うテーマフォーラムを開催し、テーマの浸透・発信を行う。

このようなプラットフォームの提供を通じて、テーマの実現に向けた活動を促進し、より実践的で優れた取組（ベストプラクティス）の創出へと繋げていく。ベストプラクティス等については、未来社会の実験場たる大阪・関西万博内でも注目されるよう会期中に会場内のベストプラクティスエリアで展示・展開するとともに、会場外やオンライン上でも発信し、その成果を披露する。

対象としては、企業、教育・研究機関（大学・研究所等）、国・政府関係機関、国際機関、自治体、NGO/NPO、市民団体等多くのステークホルダーの参加を期待し、大きな資本を持たなくても挑戦できるプログラムとする。

日本館

日本館は、大阪・関西万博の開催国館として、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」及び3つのサブテーマを体現し、来場者の心に響く体験を与えることを目指す。

日本館のテーマやコンテンツ展開は、今後策定する日本館基本構想に基づき、建築、展示、広報等の各分野において具体的な検討を進めていくことを予定しており、大阪・関西万博が掲げるテーマについて開催国として発信するメッセージや、メッセージを伝える最適な手法等について検討する。

また、日本館は、国連が定めたSDGsを踏まえた、2030年より先の未来社会における国際的なビジョンであるSDGs+beyondを体現するようなパビリオンとすべく、日本独自の視点から、SDGsに関するメッセージを発信する。

自治体等の出展（大阪館等）

大阪府と大阪市が連携した「大阪館」のほか、様々な自治体等の出展を見込んでいる。大阪館については、以下の取組となる。

大阪府と大阪市が連携し、オール大阪の知恵とアイデアを結集させ、訪れた人々が「いのち」や「健康」、近未来の暮らしを感じられる展示を実現するとともに、大阪という都市の活力・魅力を世界のより多くの人々に伝えていく。

メインテーマは“REBORN”とし、“「人」は生まれ変われる”、“新たな一歩を踏み出す”という意味を込め、「健康」という観点から未来社会の新たな価値の創造に取り組む。また、「知る・感じる」「体験できる」「みんなで参加できる」という視点から、展示やイベントを通じ、大阪・関西万博の3つのサブテーマにアプローチする。

出展参加に際しては、多様な主体と連携し、計画段階から大阪・関西万博閉会まで、府民・市民の参加と協力も得ながら、取組を推進する。

また、大阪・関西万博の開催都市として、世界の先頭に立ってSDGsの達成に貢献するため、「SDGs先進都市」の姿を明確にし、新たな取組の創出を図り、SDGs達成目標年である2030年以降を見据えた取組を世界に発信していく。

民間パビリオン

1970年の大阪万博において、世界各国のパビリオンと並んで大きな存在感を示したのが民間パビリオンである。これまで日本で開催された万博において、日本経済をけん引してきた多くの企業・団体が民間特有の自由な発想や構想力で、時々のテーマを解釈し、時代性の反映と共に未来への期待を膨らませる魅力ある展示を行ってきた。大阪・関西万博においても、現在の日本経済をけん引する企業・団体や、これからの日本経済の進むべき道筋を提案するチャレンジ精神に満ち溢れた企業・団体の積極的な参加を期待している。

万博において民間パビリオンは未来社会を感じさせてくれる「夢」であり、工夫を凝らした展示や演出によって感動を与えてくれる「華」である。大阪・関西万博では、こうした万博における民間パビリオンの役割を継承しながら、さらに一歩踏み込んで、民間パビリオンもテーマの実現に向けて共に取り組むパートナーとして位置づけ、多彩な企業による未来社会のデザインを行う。

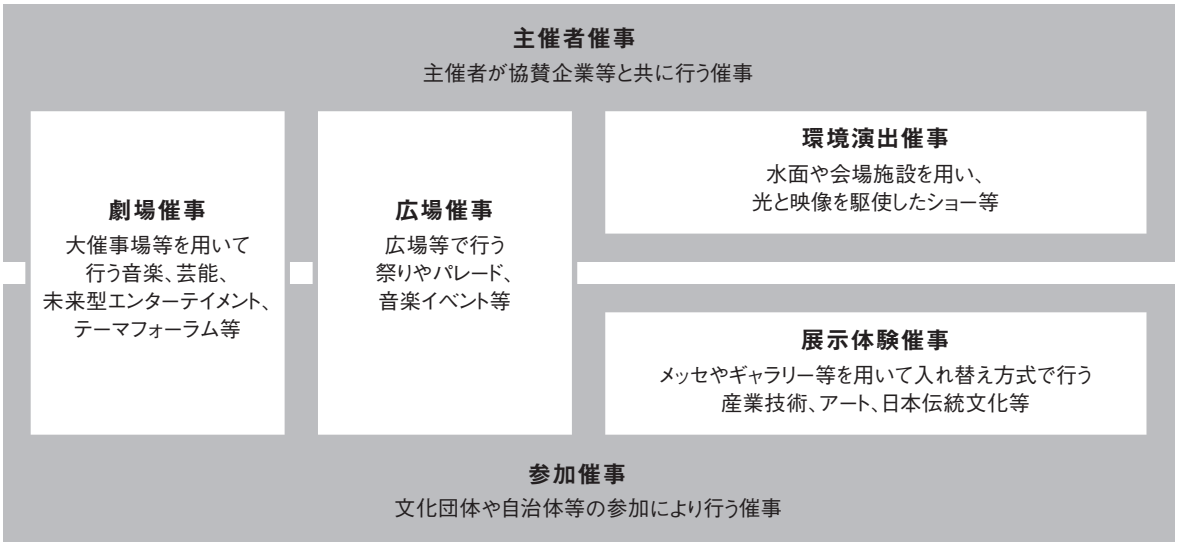
催事

万博における催事は、会場ににぎわいを与え、万博の祝祭性を高める役割を担っている。催事が充実することで、万博の楽しみに厚みが生まれ、来場者のリピート創出効果も期待できる。

大阪・関西万博では、大催事場等で行う音楽、演劇、芸能、未来型エンターテイメント、テーマフォーラム等の劇場催事に加え、広場等で行う祭りやパレード等の広場催事、会場内の水面や施設等で行う光と映像を駆使した環境演出催事、メッセやギャラリー等を用いて入れ替え方式で行う産業技術、アート、匠の技、スタートアップの取組、日本伝統文化等の展示体験催事を行う。これらの催事は、主催者が協賛企業等と共に行う主催者催事と、文化団体や自治体等の参加による参加催事に分類する。

各プログラムは有料化も検討し、集客促進や会場内の来場者数の平準化にも資する取組とする。

また、これらの催事もテーマの実現に向けて行うプログラムの一部であり、多彩な表現方法を通じていのち輝く未来社会をデザインする取組となる。



未来社会ショーケース

未来社会ショーケースは、万博会場を未来社会のショーケースに見立て、先端的な技術やシステムを取り入れることで、未来社会の一端を実現することを目指す。

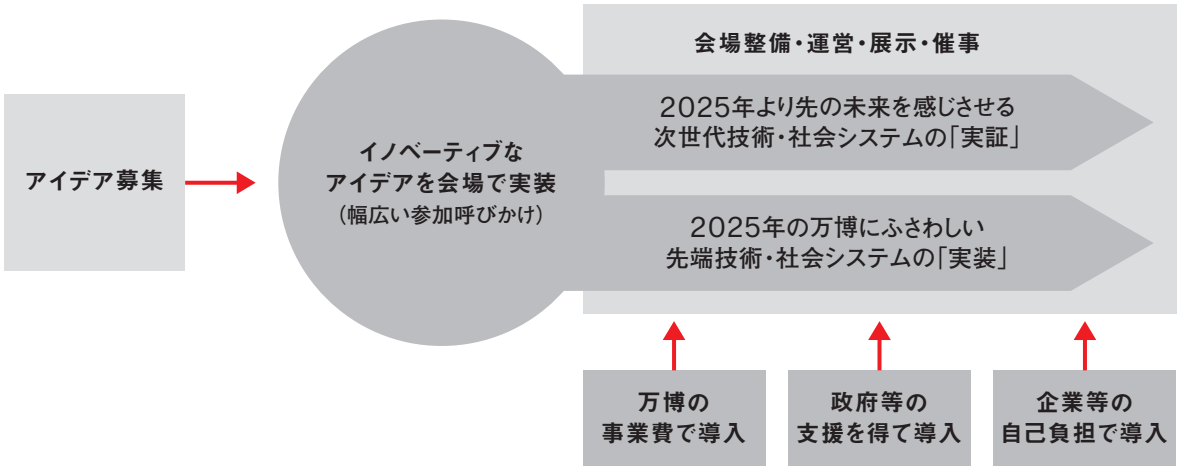
「People's Living Lab（未来社会の実験場）」という、大阪・関西万博のコンセプトに基づき、多彩な企業や大学、公的機関等との共創を通じて、「Society5.0実現型会場」を創造し、来場者に驚きと未来への展望を与える。

未来社会ショーケース事業

多様な企業による「万博という『特別な街』で出来る実証実験」への参加促進を図るため、2019年11月から、2020年3月までに計5回のPeople's Living Lab促進会議を実施した。また、2019年12月より、テーマ1「会場設計」、テーマ2「環境・エネルギー」、テーマ3「移動・モビリティ」、テーマ4「情報通信・データ」、テーマ5「エンターテイメント」等についてそれぞれアイデアを募集し、1,100件を超える提案があった。

未来社会ショーケース事業では、これらアイデア提案を含む様々な技術情報等を踏まえ、2025年より先の未来を感じさせる次世代技術・社会システムの実証と、2025年の万博にふさわしい先端技術・社会システムの実装の2つのレイヤーを念頭に会場整備・運営・展示・催事等を展開することを検討する。

事業の実施にあたっては、大阪・関西万博の事業費に加え、政府等の支援、民間企業の協賛等の協力を得て行う。



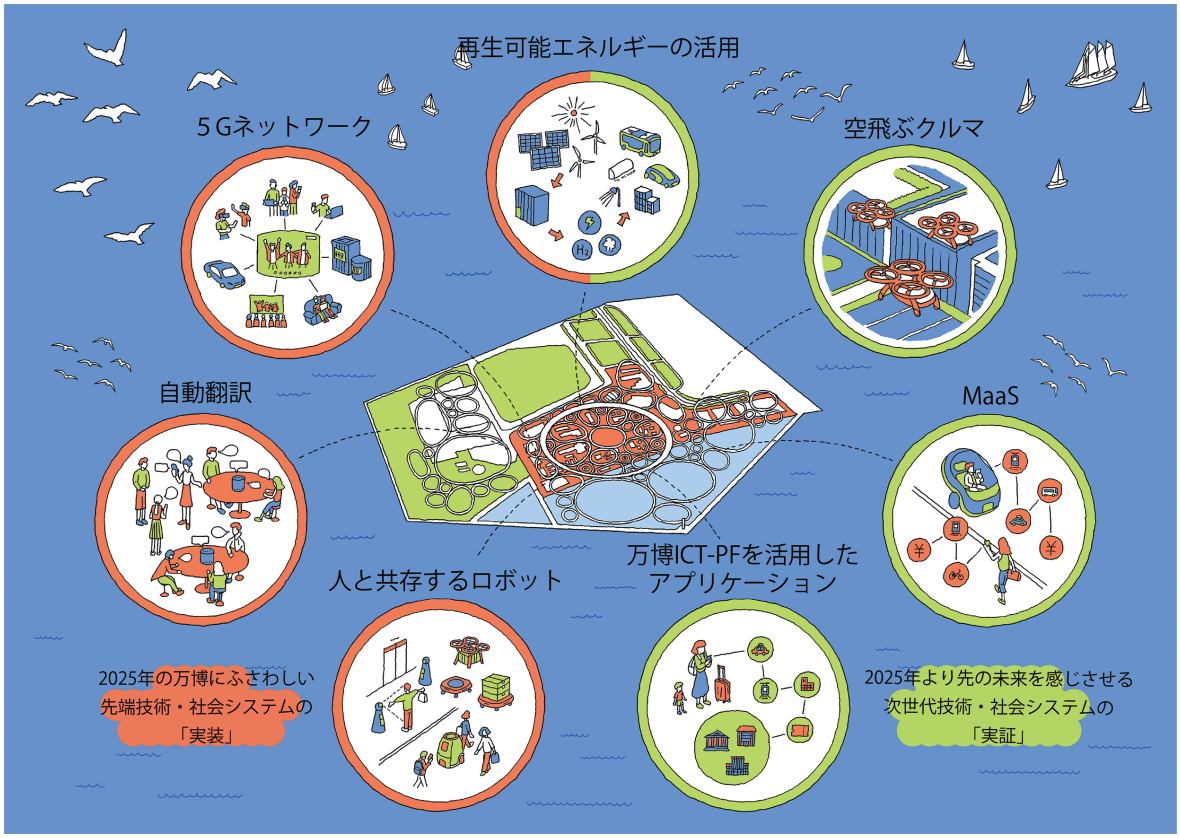


図　Society5.0実現型会場イメージ

現在検討を進めている具体的事業例を以下に挙げる。

テーマ1「会場設計」では、Society5.0実現型会場にふさわしいチケッティング、MaaS（マース）[5]、自動運転等の各種サービスを連携させる情報通信共通基盤（万博ICT-PF（プラットフォーム））や、来場者等の認証方法、セキュリティ、バックアップ等を確保するためのオペレーティングシステムの導入・活用を目指す。

テーマ2「環境・エネルギー」では、カーボンニュートラル、エネルギーを最適化する技術、水素エネルギー技術のショーケースとしての導入を目指す。

テーマ3「移動・モビリティ」では、外部アプリとの連携等を通じて、万博会場外の公共交通や会場内のモビリティ、チケット購入等の関連サービスを組み合わせた検索・予約・決済等や、会場内の情報、周辺の観光情報等を、AIを活用し最適化し提供するアプリの構築を検討する。また、次世代モビリティとしての利活用が期待される空飛ぶクルマにより来場者に新たな移動体験を提供することを目指す。

テーマ4「情報通信・データ」では、Society5.0実現型会場の重要インフラであるネットワークとして、高速・大容量、低遅延、多数同時接続の5G等ネットワークの整備を進めるほか、技術の進展に伴う新たな技術要素の導入も目指す。

テーマ5「会場内エンターテイメント」では、リアルとバーチャルの融合を活用した、未来のエンターテイメントの実現を目指す。

その他、清掃、ごみ運搬、物流、モビリティ等、実用化が進んだ分野の人と共存するロボットや言語の壁を感じさせない環境を実現する自動翻訳技術等の導入をテーマ横断的に検討する。また、科学技術・イノベーション、宇宙、海洋等の分野において様々な官民プロジェクトが今後進んでいくことを踏まえ、それらのプロジェクトの万博会場における実証を目指す。

5　Mobility as a Serviceの略。地域住民や旅行者一人一人の個々の移動ニーズに対応して、複数の公共交通やそれ以外の移動サービスを最適に組み合わせて検索・予約・決済等を一括で行うサービス。観光や医療等の目的地における交通以外のサービス等との連携により、移動の利便性向上や地域の課題解決にも資する重要な手段となる。

バーチャル万博

大阪・関西万博では、未来社会をデザインする万博として、AR（拡張現実）[6]やVR（仮想現実）[7]等のバーチャル技術を活用して万博の魅力と発信力を高める「バーチャル万博」を行う。

バーチャル万博は、3つの領域で構成する。これらにより、万博会場での体験を快適で価値あるものにし、また、実際に会場に来たくても来ることができない障がい者、高齢者、遠方の方等、世界中の多くの人が参加できるインクルーシブな万博を実現する。

万博会場内では、各入場券に割り当てられた固有のIDを活用して、案内、展示、催事等にAR等のバーチャル技術を用いることで、会場内でより豊かな体験を提供する。

また、会場や展示施設に設置したカメラの映像や、各国公式参加者、企業・団体等が会場内のオンライン空間に展開する展示や催事のプログラムを、会場外のオンライン空間から体験できるようなオープンなアプリケーションプログラミングインターフェース（API）[8]を用意する。例えばバーチャル催事やバーチャルテーマ館にアクセスできるプラットフォームシステムを用意し、来場者がパビリオン等でAR映像を楽しめたり、その場にいなくともアバターとしてパビリオン等を楽しんだり、遠隔から催事に参加できるような仕組みを検討する。

さらに、会場で行うプログラムとは別の様々なコンテンツをオンライン空間上に展開する取組を行う。

	万博会場内（案内、展示、催事）	万博会場とは別のプログラム
万博会場	会場内の展示や催事、 運営サービスを バーチャル技術を用いて高度化	
オンライン空間	会場外からアバターで 参加可能な万博会場を オンライン空間上に展開	会場の内容とは 別のプログラムを オンライン空間上で展開

6　Augmented Realityの略。現実世界（一部）に仮想の情報を重ね合わせる技術。スマートフォンやタブレット型端末を利用して、カメラ等から入力された実際の映像の手前にコンピューター画像を表示する。

7　Virtual Realityの略。現実世界の情報は遮断して仮想世界のみを描く技術。視界全面を覆うヘッドマウントディスプレイ等で仮想世界を体験する。

8　あるサービスやアプリケーションにおいて、その機能や管理するデータ等をほかのサービスやアプリケーションから呼び出して利用するための接続仕様等。APIはApplication Programming Interfaceの略。

3

第3章　主催者企画事業

3.1 テーマ事業

私たちのいのちは、この世界の宇宙・海洋・大地という器に支えられ、互いに繋がりあって成り立っている。その中で人類は、環境に応じて多様な文化を築き上げることにより、地球上のいたるところに生活の場を拡大した。その一方で、人類は、利己を優先するあまり、時として、自然環境をかく乱し、さらには同じ人類のほかの集団の犠牲の上に、不均衡な社会を作り上げてきてしまったのも事実である。そして今、生命科学やデジタル技術の急速な発達にともない、いのちへの向き合い方や社会のかたちそのものが大きく変わりつつある。

いのちそのものを改変するまでの高度な科学を築き上げた私たちには、人類が生態系全体の一部であることを真摯に受けとめるとともに、自らが生み出した科学技術を用いて未来を切り開く責務があることを自覚し、行動することが求められる。自然界に存在する様々ないのちの共通性と相違性を認識し、他者への共感を育み、また多様な文化や考えを尊重しあうことによって、ともにこの世界を生きていく。そうすることによって、私たち人類は、地球規模での様々な課題に対して新たな価値観を生み出し、持続可能な未来を構築することができるに違いない。

このような信念に基づいて開催しようとする2025年大阪・関西万博は、2020年以来、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の地球規模での拡大という未曾有の局面に立ち会うことになった人類にとって、このような局面だからこそ見えてくる人類の可能性を確認しあい、新たないのちのありようや社会のかたちを検証し提案する、二度とない機会を提供する場となった。

2025年日本国際博覧会協会は、一人一人が互いの多様性を認め、「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するため、以下の8つのテーマ事業を設定することとした。

「いのちを知る」

「いのちを育む」

「いのちを守る」

「いのちをつむぐ」

「いのちを拡げる」

「いのちを高める」

「いのちを磨く」

「いのちを響き合わせる」

これらのテーマ事業から得られる体験は、人々にいのちを考えるきっかけを与え、創造的な行動を促すものとなるに違いない。他者のため、地球のために、一人一人が少しの努力をすることをはじめる。その重なり合い、響きあいが、人を笑顔にし、ともに「いのち輝く未来社会をデザインすること」につながっていく。

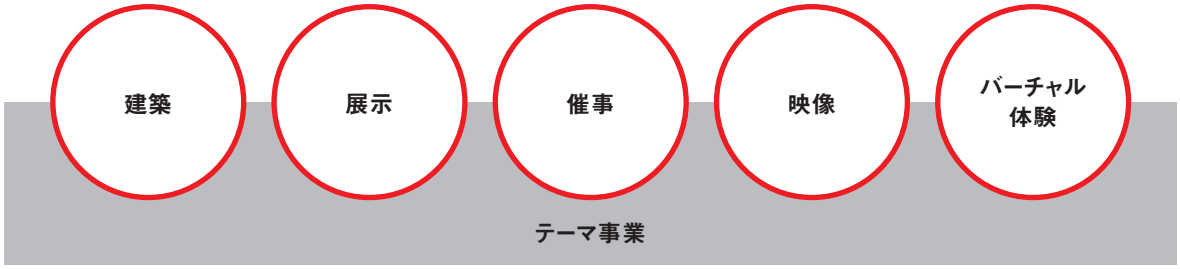
世界の人々と、「いのちの賛歌」を歌い上げ、大阪・関西万博を「いのち輝く未来をデザインする」場としたい。

これは、いのちを起点に、世界の人々と未来を共創する挑戦にほかならない。

テーマ事業の基本方針

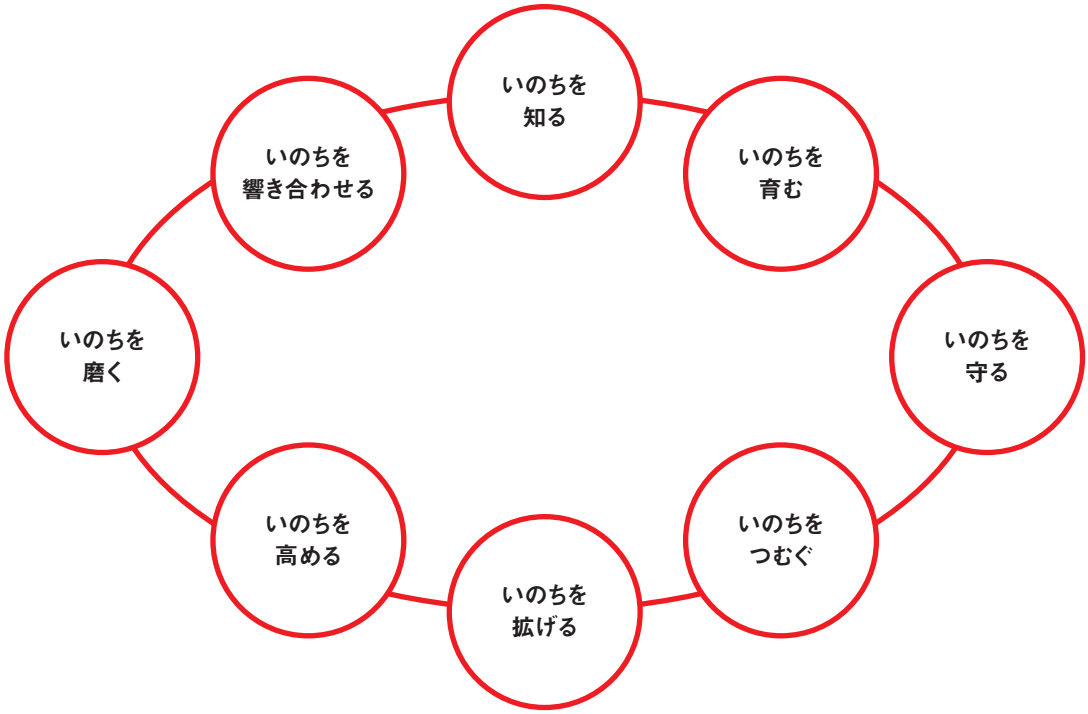
多彩な手法を組み合わせたテーマ表現

テーマ事業は、建築、展示、催事、映像、バーチャル体験等、多彩な手法を組み合わせてテーマを表現する。



独立と連携の両立

8つのテーマ事業は、それぞれ独立した事業として会場内に配置すると同時に、それらをひとつの動線でつなぐことで、テーマが独立しながらも互いに連携している様子を表現する。



クリエイティブ・ドリブンによる事業企画

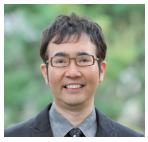
地球的課題の解決において創造力は極めて重要であり、創造力を活かすことのできる社会の未来像を示すために、テーマ事業は、創造力を主体とした事業構築手法（クリエイティブ・ドリブン）によって進めることとする。

そのため、テーマ事業に掲げた8つのテーマについて、それぞれの分野の最前線で活躍するエキスパートをテーマ事業プロデューサーに起用し、個々の創造性と相互連携による共創を組み合わせてテーマ事業の企画（パビリオンや催事等）を推進する。

企画が具体化した後に、企業・団体等の参加を得て、実装していく。

クリエイティブ・ドリブンによる事業企画

いのちを知る
生命系全体の中にある
私たちのいのちの在り方を確認する。



福岡 伸一
生物学者、
青山学院大学教授

いのちを育む
宇宙・海洋・大地に宿る
あらゆるいのちのつながりを感じ、共に守り育てる。



河森 正治
アニメーション監督、
メカニックデザイナー

いのちを守る
危機に瀕し、人類は「分断」を経験する。
「わたし」の中の「あなた」を認めるいとなみの行方に、
多様ないのちが、それぞれに、護られてゆく未来を描く。



河瀬 直美
映画監督

いのちをつむぐ
自然と文化、人と人とを紡ぐ「食べる」という行為の
価値を考え、日本の食文化の根幹にある
「いただきます」という精神を発信する。



小山 薫堂
放送作家、脚本家

いのちを拡げる
新たな科学技術で人や生物の機能や能力を拡張し、
いのちを広げる可能性を探求する。



石黒 浩
大阪大学教授、
ATR 石黒特別研究所客員所長

いのちを高める
遊びや学び、スポーツや芸術を通して、
生きる喜びや楽しさを感じ、
ともにいのちを高めていく共創の場を創出する。



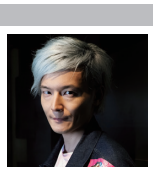
中島 さち子
音楽家、数学研究者、
STEAM 教育家

いのちを磨く
自然と人工物、フィジカルとバーチャルの融和により、
自然と調和する芸術の形を追求し、
新たな未来の輝きを求める。



落合 陽一
メディアアーティスト

いのちを響き合わせる
個性あるいのちといのちを響き合わせ、
「共鳴するいのち」を共に体験する中で、
一人ひとりが輝くことのできる世界の模式図を描く。



宮田 裕章
慶応義塾大学教授

テーマ事業「いのちを知る」

福岡 伸一プロデューサー

メインテーマ

2025年あなたはどのような「利他性」を示せますか?
～利己的遺伝子から利他的共生へ～

●コンセプト

テーマ事業「いのちを知る」では、生命の進化史をあらためて総覧し、そこでは、利己的遺伝子の競争ではなく、むしろ“利他的”な共生が繰り返されて進展してきたことに着目、私たち人間社会のいのちの在り方も、利己から利他へのパラダイム・シフトの中で捉え直すことを提案する。

●コンテンツ展開イメージ

パビリオンは、生命の利他的共生を象徴する生物の形態や活動等をモチーフにデザインする。

併せて、生命の利他的共生を、来場者が楽しく印象的に体験する展示コンテンツを展開し表現する。生命への畏敬を知るため、福岡伸一セレクションのライブ生物園「いのちワンダーランド」を併設。

コンテンツ展開

生命の利他的共生を象徴的に表現し、未来に生きるメッセージを印象づける

利他性を強く印象づける建築

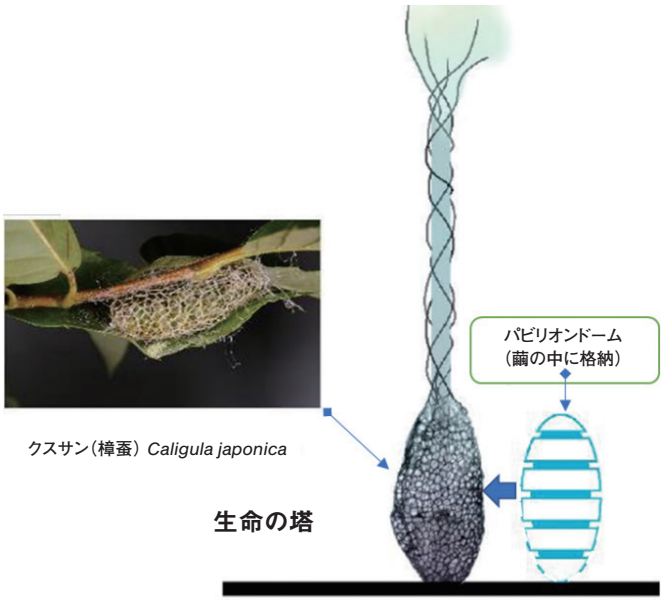
- 生命系の利他的ネットワークを表現
- 日本を代表する蛾「クスサン」の繭をモチーフにした巨大繭のパビリオン建築

利他性を体験する生命史展示

- 生命の利他的革命
- 6回の大絶滅（現在6度目）人類史における危機と叡智

●デザインイメージ

日本を代表する蛾「クスサン」の
精妙で強靱な繭を生命系の利他的共生の
モチーフとした場合の空間デザインのイメージ



クスサン（樟蚕）*Caligula japonica*

※建築物や内装の意匠や構造を検討するためのイメージであり、実際のデザインは今後検討予定。

テーマ事業「いのちを育む」

河森 正治プロデューサー

メインテーマ

「今 ここに共に生きる 奇跡」

●コンセプト

テーマ事業「いのちを育む」では、はかなくて、尊くて、力強くて、愛おしくて、美しいいのちの輝きと、宇宙・海洋・大地に宿るあらゆるいのちのつながりを表現。人間中心からいのち中心へのパラダイムシフトと、いのちを守り育てることの大切さを訴求することを目指す。

●コンテンツ展開イメージ

ここで体験する宇宙・海洋・大地を再発見する旅を印象づける巨大な樹、地球、宇宙ステーション、深海探査艇等を造形したパビリオンをデザイン。その中を巡りARや特殊サウンド等の最新技術を使い「今 ここに共に生きる 奇跡」を五感＋αで感じられる展示やワークショップ等を体験する。

リアル空間

生々流転する生命のダイナミズムを体感
- 鳥や魚や植物等に、食物連鎖を通じて次々に変身していく体感変容型アトラクション

いのちのはじまりの部屋
- 胎内のあたたかな鼓動を感じるスモールドーム
- 卵からの成長体験

感受性の拡張を伝統的社会や野生動物に学ぶ体験
- 五感＋αを深く鋭ぎすまし、自然との一体感を深めていくリアル体験型ワークショップ
- AR、VRを活用した、感受性開発トレーニング

クリエイティブアース
- いのち輝く多重世界をデザインするオンラインシミュレーションゲーム
- リアルとデジタルの相違を軸に構成

バーチャル空間（インターネットからアクセスできる展示空間）

広域・未来のネットワーク

生物共創プロジェクトとの連携
- 虫や雑草と共創する農園、鳥と共創する植林・環境浄化等をネットワーク

いのちを育む未来共創学園
- 多用な生物が共創する中でいのちを学ぶ、未来型の環境育成学園構想

●デザインイメージ



※建築物や内装の意匠や構造を検討するためのイメージであり、実際のデザインは今後検討予定。

テーマ事業「いのちを守る」

河瀬 直美プロデューサー

メインテーマ

「護られた命の中に存在する“わたし”と“あなた”“わたし”の中の“あなた”を知る旅のはじまり」

●コンセプト

テーマ事業「いのちを守る」では、「人類がこれほどまでに繁栄を遂げたのは、他者の話を信じてつながる能力があったためであり、分断は他者を知らないことによって生じている」というメッセージを伝えるために、「知る」という行為を体現できる「場」を設け、「わたし」の中の「あなた」を認めるといういとなみを創出する。それによって、多様ないのちがそれぞれに護られてゆく未来像が世界に共有されていくことを目指す。

●コンテンツ展開イメージ

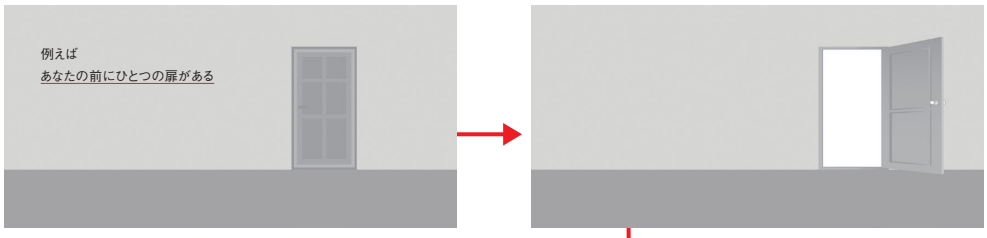
世界中の人との出会い、信頼を生み出す体験によって「わたし」の中の「あなた」を知る旅を提供。出会いの数を演出的に表現することで、メッセージの拡がりを可視化する。

コンテンツ展開

世界中の人と繋がることのできる「出会いの部屋」

「わたし」が200のドアの向こうにいる世界の「あなた」と出会い、「わたし」の中の「あなた」を知る旅

最新技術による体験をデザイン





©Creative commons

78億人の「命の実」が浮かぶ空間

出会った人の数と共に「命の実」が増え続け
万博が終わる頃、全世界の人口78億人の命の森が完成し、空間が「緑」に染まる。

※演出を検討するためのイメージであり、実際の内容は今後検討予定。

テーマ事業「いのちをつむぐ」

小山 薫堂プロデューサー

メインテーマ

「“いただきます!”を世界語に」

●コンセプト

テーマ事業「いのちをつむぐ」では、自然と向き合って生活し文化を紡いできた日本人特有の感性から、自然(生態系)や身体(生命)、芸術文化、テクノロジー、コミュニケーションと食との関係性をクローズアップし、日本の食文化の根幹にある「いただきます」「ごちそうさま」の精神を世界に向けて発信する。

●コンテンツ展開イメージ

人と食べものの関係を多面的に描く「食のミュージアム」空間を設け、日本の食文化を体験できる横丁やキッチンスタジアム等の演出を行う。また、万博後もレガシーとして受け継がれる食の世界大会や世界の「食」とリアルタイムに繋がるモニュメントの設置等にも取り組む。



コンテンツ展開

展示、飲食、イベントの体験で「いただきます!」の心を世界に提案

展示

食といのちのインスタレーション

●多様な生命の人は何を食べ、
何を食べないのか?
何故それを食べるのか?
食といのちの関係を考え始める
アート空間を構築

「食のミュージアム」

●食のルーツと未来を考えることは、
人間の生き方を考えること。
“食”から生まれた文化を通して、
過去・現在・未来における
人類と食べものの関係を探る

飲食

食の現在と未来を体感する横丁

●「ITADAKI-MASU」と「GOCHISOU-SAMA」という日本の食分化の根幹にある精神を通じて、
食の過去から現在と未来を体験する空間

イベント等

食の世界勲章

●万博から近代オリンピックが生まれたように、
レガシーとして万博後も残る
「食の世界大会」を開催

キッチンスタジアム〜多様な食のプログラム

●最大の集客コンテンツである
「食」の強みを活かす

「食のリレー」モニュメント

●「世界の人々がいま何を食べているか」をリアルタイムなモニュメントを構築

テーマ事業「いのちを拡げる」

石黒 浩プロデューサー

メインテーマ

「人間が自ら設計する“生きたい未来発見”」

●コンセプト

科学技術（特に分子生物学やコンピュータ技術）により、人間は生物進化のメカニズムを超えて進化するようになった。すなわち、人間の未来は、生物としての人間に必然に訪れるものではなく、人間が自ら設計する必要がある。ここでは、最先端の科学技術の体験でそれによって多様に発展する人間のいのちに思いを馳せ、互いに対話しながら生きたいそれぞれの未来を見つける。

●コンテンツ展開イメージ

あらゆる人が集まれるリアル空間とバーチャル空間を設ける。その空間で提供されるいのちを拡張する様々な体験によって「いのちの感動」をもたらし、「多様ないのちの在り方」について対話し未来へのメッセージを発信する。

リアル空間

いのちと人間の拡張を見せる3つのゾーンによる「いのちの感動」

ロボットアバター
アバターを用いた
時空を超えた
遠隔参加

いのちを知る
人間と機械の
生命の展示
大学、企業による
コラボ展示

→

いのちを考える
人間と機械による
生命の物語
人間とロボットについて
深く考えるロボット演劇

→

いのちを感じる
人間と機械による
生命の芸術
ロボットと音楽が
融合したロボットオペラ

CGアバター

空間、時間を超えて、世界中から誰もが好みの姿で好みの空間に参加する世界
気軽に、データ、自己、他者が混沌とするアバターとデータの世界

バーチャル空間

実空間とも繋がったインターネットからアクセスできる万博仮想空間（万博実空間ともリンクしている）

●演出イメージ



※演出を検討するためのイメージであり、実際の内容は今後検討予定。

テーマ事業「いのちを高める」

中島 さち子プロデューサー

メインテーマ

「感性がひらく!〜いのちのおまつり〜」

●コンセプト

「いのちが躍る、歌う、ひらく、生きている!」という感覚を、常識(自分たちが普段見て聴いている世界)を超えた体験によって一人一人の自由な感性をひらき、人・自然・もの・AIたちが時空間を共創することで生み出す。世界中のこどもや多様な方々と<いのちが燃える学び・遊び>を生み出していく流れの中で立ち現れる、五感の遊び舎。これらの「いのちを高める」体験で、「いのちの輝き」を心に刻む。万物参加型共創社会をデザイン。

●コンテンツ展開イメージ

こども・おとな・万物のいのちが燃える学びと遊びコンテンツを開発し、会場での双方向の五感体験につなげる。会期中だけでなく、会期前から会期後まで、遠隔やデジタル世界ともつなぎ、世界中の多様な方を<万博のテーマを共に模索する・万博を共に創る当事者>にする取組みを目指す。

コンテンツ展開(5エリアは融合想定、体験はあくまでも仮案)

自らインタラクトし創る体験と感性が開く五感の遊び舎+風とともに歌い躍る、いのちあるパビリオン

聴覚がひらく〈音楽〉

- 森の五感協奏室:自身や物が音に!
  五感や身体性による空間協奏曲。森を元気に。
- ワールドステージ:世界中のバンドやオペラ、能、
  民謡、踊りと3Dライブバーチャルで共演

視覚がひらく〈数学〉

- 高次元の旅:4次元や曲がった空間をVRで旅する
- ミクロ-マクロの旅:分子や宇宙の気持ちに
- 変異するいのちの数理モデル体験
- メタ確率アート:参加者が1要素になり会期中に誕生

いのちの曼荼羅〈自然〉

- 粘菌やアリと創る万博:事前に採集育成した
  粘菌による動く、いのちの曼荼羅芸術
- 虫の眼と耳体験:虫や鳥や
  動物を模したモビリティで自然を体験

価値がひらく〈ごみ〉

- ごみの旅:自ら缶やシャツ等になり、
  変化していくごみのVR旅
- 夢洲物語:夢洲がどう生まれ、
  どんなごみがこの場所を支えているかを知る

身体性がひらく〈スポーツ〉

- 空の踊り:ドローンや雲、風、光、宇宙線との共創ダンス
- アスリートのアンドロイドと一緒にプレイ、
  自身の動きの隠れた数値を可視化

●演出イメージ



※演出を検討するためのイメージであり、実際の内容は今後検討予定。

テーマ事業「いのちを磨く」

落合 陽一プロデューサー

メインテーマ

「万物が溶け合い物化し変遷する
共感覚的な風景の構築と体験の提供」

●コンセプト

テーマ事業「いのちを磨く」では、自然とデジタルの融和により、そこで磨かれる命、芸術が現れる瞬間を見出し、未来ビジョンを考える。自然とデジタルが融和したデジタルネイチャーともいえる新しい自然を描き出し、あらゆる現象を音楽のように共感覚化していく体験を提供する。

●コンテンツ展開イメージ

- パビリオン自体が未だ見たことのない風景を変換するモニュメントであり、メディアアート装置でもある
- 全ての人が技術インフラによって協調できるようになった風景を見ることができる
- デジタル技術と民芸的造作や伝統工芸、地産地消の名産品等が合流し、独自に着地した風景をつくる
- アニメやSFやサブカルチャー等の豊かな土壌の下、アーティスティックなハードやソフトが俯瞰できる
- 超感覚的なコンサートやレストラン（共感覚を多用した触覚・視覚・聴覚に俯瞰するようなもの）の実現
- デジタル技術と自然が融合した新しい風景、新しい自然観の中で人間回帰と非人間への変換の間を越境する体験
- 縄文時代や古墳時代から通底し、戦前昭和平成令和を接続するコンテクストを再定義する、レガシーとなるモチーフを探求

コンテンツ展開

万物が溶け合い物化し変遷する共感覚的な風景の構築と体験の提供

**未だ見たことの無い
有機的な風景を変換するモニュメント**

変形メタマテリアル構造や
光学的メタマテリアル構造等によって構築された、
人類が未だ見たことの無い有機的な風景の変換装置、
風景とともにトランスフォーメーションする外観をもつ
モニュメント建築

**世界と日本のメディアアート周辺技術を結集した
共感覚体験**

人の精神がトランスフォーメーションする
人々の感覚がデジタル技術によって変換され物化し、
音と光と触覚による共感覚的な風景に誘われる
空間を構築する。東洋的自然観の下、歴史、文化、
科学技術、芸術が融合する感覚を提示

●デザインイメージ



※建築物や内装の意匠や構造を検討するためのイメージであり、実際のデザインは今後検討予定。

テーマ事業「いのちを響き合わせる」

宮田 裕章プロデューサー

メインテーマ

「いのちを響き合わせて創る、多様な社会 その世界を共に体験する中で、一人ひとりが輝く」

●コンセプト

テーマ事業「いのちを響き合わせる」では、文明の転換点の中で新しい世界を共に創る体感をする展示である。現在は経済だけでなく、健康、環境、教育、人権等の多元的な軸で世界を再構成する文明の転換点である。つながる世界では多様ないのちを尊重し、だれも取り残さない未来を目指すなかで、一人ひとりが輝くことができる。いのちを響き合わせて世界を共に創るHuman Co-being時代が始まる。

●コンテンツ展開イメージ

- **「いのちの輝き」の再定義 Better Co-being**

  「いのちの輝き」を個体レベル内の生体システムだけでなく個体と環境、個体間や社会等、様々なシステムの相互作用の中で捉え、だれもがどんな時もこころ豊かに生きることができる世界を目指す。様々なBetter Co-beingのアプローチを通して、未来の多様な豊かさを共有する。

- **未来への約束Future Tag**

  万博に参加するすべての主体（参加国、企業、市民、来場者、主催者、関係者等）が、持続可能な未来にどのように貢献するのかを示す『Future Tag』を用いて様々な活動を行う。「万博＝未来への約束の場」という万博の新たな価値の創造にチャレンジする。

- **フィジカルとバーチャルで展開する、共鳴する未来**

  展示、催事、プログラムという3つの万博事業手法に社会の様々なデータを組み合わせて展開することにより、地球規模で生み出される新たな価値がリアルタイムに変化していく様を、具体的に（又は抽象的なアート表現として）万博会場から発信する。

コンテンツ展開

いのちの輝きを感じる忘れがたい体験を提供

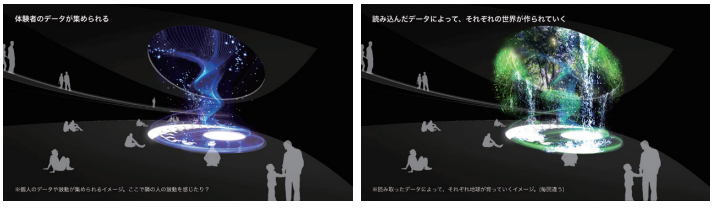
いのちの輝きを感じる共鳴体験

- 人類史上初めてのVR/AR による3D映像と、人間の可聴領域を超える、3D 空間音響と、高解像度3Dハプティック（触覚）を組み合わせたインタラクティブな共感覚シアターを設置する。
- こうした共感覚×共鳴体験の中で、人々がいのちのつながりを感じ、一人ひとりのいのちの輝きを体験する。

共鳴するモニュメント

- 過去から現在にいたる様々ないのちをつなぎ、人々の祈りを集め、ときに共に歩く道を照らし、時には人を包みこむ多様ないのちが輝きを体験する。見守る人々（万博来場者及び世界中の遠隔参加者）の未来選択によって繁々と育つことも枯れ始めることもある。未来選択のバロメーターは世界に散らばる膨大な社会データ。

●演出イメージ



※演出を検討するためのイメージであり、実際の内容は今後検討予定。

3.2 催事

大阪・関西万博では、劇場催事、広場催事、環境演出催事、展示体験催事等を行う。これらは、主催者が協賛企業等と共に行う主催者催事と、文化団体や自治体等の参加による参加催事に分類する。

各プログラムは有料化も検討し、集客促進や会場内の来場者数の平準化にも資する取組とする。

劇場催事（主催者催事 / 参加催事）

大催事場及び小催事場において、音楽、演劇、芸能、未来型エンターテイメント、テーマフォーラム等の催事プログラムを実施する。

音楽

主催者催事、参加催事ともに、多彩なジャンルの音楽を、会期中入れ替えながら実施。

演劇

主催者催事は、我が国の演劇文化を代表するプログラムを、会期中の一定期間連続で実施。
参加催事は、会期中入れ替えで実施。

芸能

主催者催事、参加催事ともに、我が国の芸能文化を代表するプログラムで、伝統的なものから最新の演出を取り入れた未来のエンターテイメントとなる催事までを会期中入れ替えながら実施。

未来型エンターテイメント

主催者催事、参加催事ともに、ゲーム等デジタル技術を駆使した未来型エンターテイメントを会期中入れ替えながら実施。

テーマフォーラム

主催者催事、参加催事ともに、様々な形態のテーマフォーラムを会期中入れ替えながら実施。

広場催事（主催者催事 / 参加催事）

会場内の屋外イベント広場及び広場に設置する小規模なステージにおいて、音楽、映像、パレード及びアートプログラムを実施する。主催者催事は会期中通期で行い、参加催事は入れ替えで行う。

ステージ催事

屋外イベント広場の大型ステージやパビリオンワールド内の広場に設置する小規模なステージにおいて、音楽、トークライブ、テーマフォーラム等のイベントを実施。

映像

広場に備えた大型映像装置を用いて、映像コンテンツの上映や双方向型の交流イベントを実施。

パレード / 祭り

主催者催事は、一般的なフロート（山車）を用いて練り歩くスタイルにこだわらず自由な発想によるパレードを実施。参加催事は、各地の祭りや伝統芸能等を入れ替えで実施。



図　屋外イベント広場イメージ

環境演出催事（主催者催事）

会場内の水面や施設を用いて、光と映像を駆使した環境演出催事を行う。環境演出催事は主催者催事のみとするが、多彩なアーティストやクリエイターが参加できる機会を設けるよう工夫する。

ウォーターワールドで行う催事

ウォーターワールドの水面を用いて、光や音楽による壮大なショーを実施。

パビリオンワールドで行う催事

会場内のテントや施設を用いて、光と映像を駆使した環境演出催事を実施。エリアや時期を分けて、複数のクリエイターが参加。

アートプログラム

会場内の様々な場所で、展示、実演、映像等多彩なスタイルのアートプログラムを実施。
エリアや時期を分けて、複数のアーティストが参加。



図　ウォーターワールドで行う環境演出催事のイメージ

展示体験催事（参加催事）

メッセ、ギャラリー、庭園等を用いて、産業技術、アート、伝統文化等の展示体験催事を行う。展示体験催事は参加催事のみとするが、企画の内容によって主催者が参加する場合もある。

メッセ展示会

会場内のメッセを用いて、産業技術や文化関連の展示会を入れ替えで実施。

ギャラリー展示会

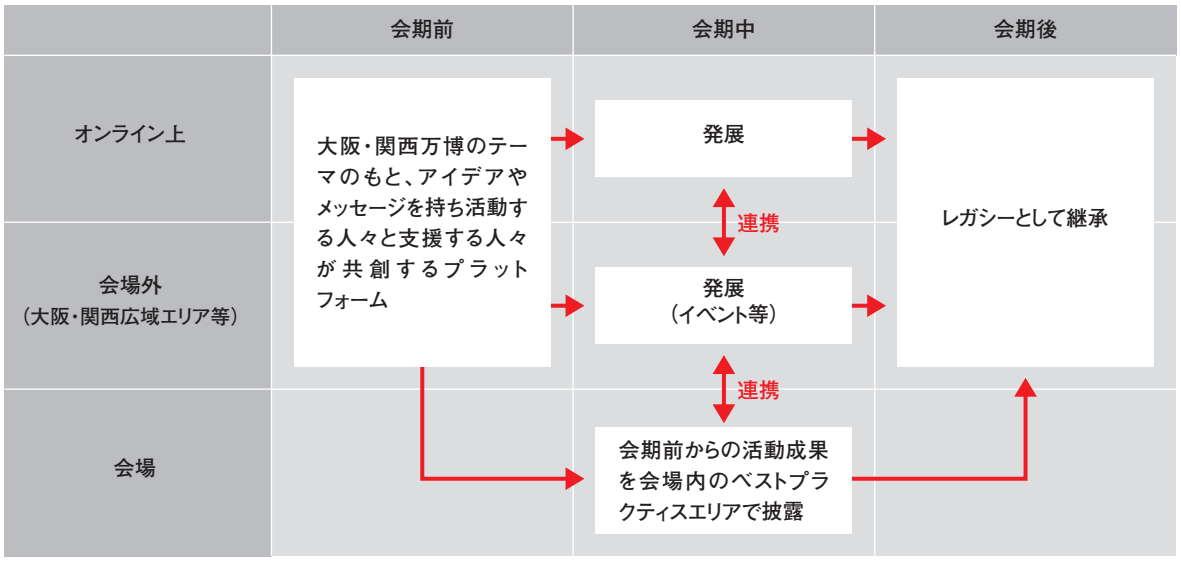
会場内のギャラリーを用いて、アニメやファッション等の展示会を入れ替えで実施。

伝統文化展示会

庭園において、お茶や生け花等、日本の伝統文化の展示会を入れ替えで実施。

3.3 「TEAM EXPO 2025」プログラム

「TEAM EXPO 2025」プログラムは、時間的・空間的に幅広い範囲で大阪・関西万博のテーマを発信していく事業であり、本万博において重要な役割を持つ。時間軸においては、会期前から、会期中、会期後までを見据え、空間軸においては、万博会場内、大阪・関西広域エリア等、オンライン上までをも視野に入れた、スケールの大きな事業として取り組む。



参加主体	企業、教育・研究機関（大学・研究所等）、国・政府関係機関、国際機関、自治体、NGO/NPO、市民団体等

テーマの実現に向けた共創の創出

「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するために、自らが主体となって未来に向けて取り組んでいる、また取り組もうとしている活動を募り、“「TEAM EXPO 2025」プログラム／共創チャレンジ”として登録を行う。また、共創チャレンジを支援できる様々なスキル・強み・リソースを持つ法人・団体等を“「TEAM EXPO 2025」プログラム／共創パートナー”として集め、チャレンジする人々と支援する人々が出会い・共創するプラットフォームを提供する。例えば、テーマフォーラム（後述）や専用ウェブサイト等における情報発信・交流等により、オンライン・オフライン双方での共創の場を作り出していく。

テーマフォーラム

国内外への大阪・関西万博のテーマの浸透及び理解促進、また機運醸成のため、本万博の掲げるテーマを軸に、多くの実践者や有識者を招き議論する場として「テーマフォーラム」を開催する。テーマフォーラムは、会期前から会期中に至るまで、博覧会国際事務局（BIE）や様々な機関とも連携し、国内外で多様な形態・規模で実施する。テーマフォーラムの開催により生まれた議論の成果については後世に継承していくことを目指す。

なお、実施にあたっては自動翻訳技術の進歩等を見据えた先端技術の活用を目指す。

ベストプラクティスエリア等における成果の発信

「TEAM EXPO 2025」プログラムにより集まった「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するための活動等のうち、実践的で世界各地で再生可能な、将来のために活用できる特に優れた取組については「ベストプラクティス」として位置付け、会場内に設けたベストプラクティスエリアで展示・展開する。また、期間を区切った入れ替わりの展示や会場内のほかの場所での展示・催事との連携等、ベストプラクティスをはじめとしたより多くの優れた活動を来場者に披露できる仕組みを検討する。さらに、会場内だけでなく、会場外の大阪・関西広域エリア等のイベントやオンライン上においても、ベストプラクティスを中心に「TEAM EXPO 2025」プログラムの優れた活動を広く紹介・発信する。



図　ベストプラクティスエリアのイメージ

4

第4章 参加計画

4.1 公式参加

BIE加盟国を中心とした世界各国の参加

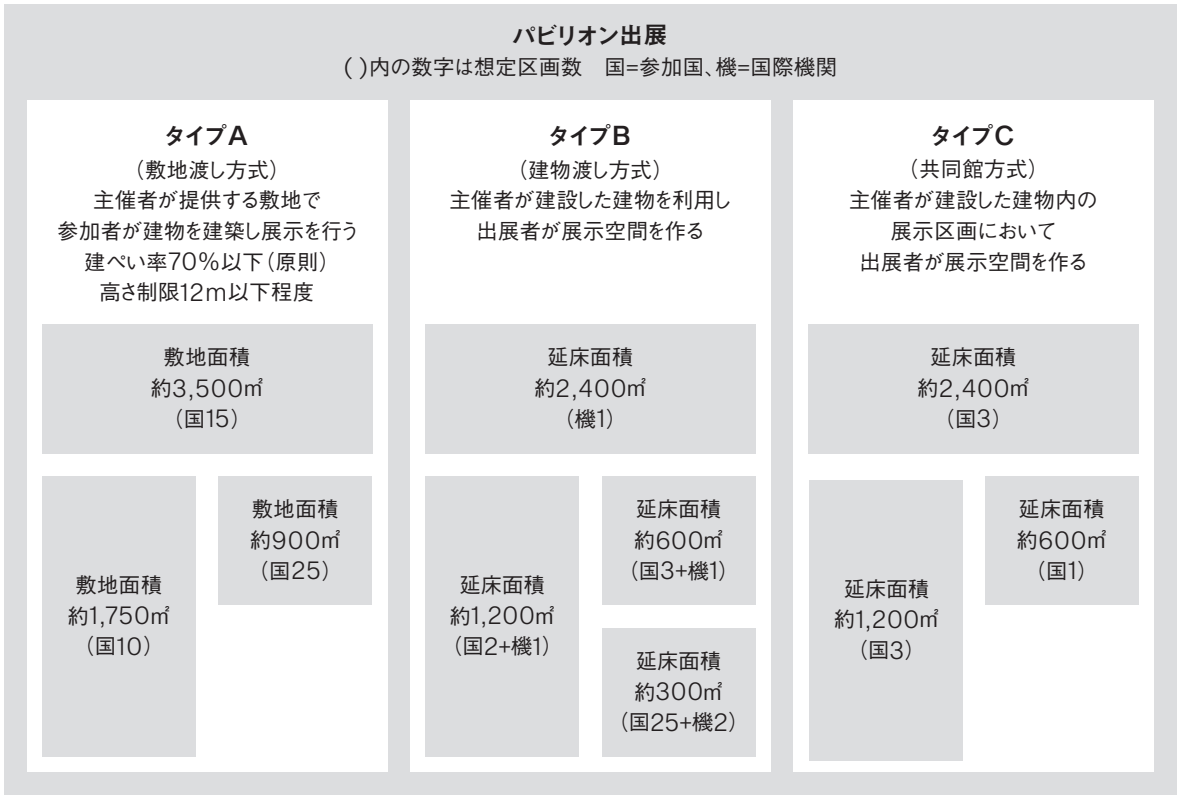
150の国及び25の国際機関の参加を目指す

大阪・関西万博は、国及び国際機関（公式参加者）による参加について、BIE加盟国等150ヵ国及び国際機関25機関の参加を目標とし、様々な取組を行っていく。公式参加者は、会場内にパビリオンを出展することができる。また、原則として会期中の1日間を、国の場合はナショナルデー、国際機関の場合はスペシャルデーとして定め、公式式典及び関連催事を行うことができる。

公式参加者に対しては、出展計画策定を支援するための各種ガイドラインを設ける。

また、出展の準備段階から閉会後の資材の撤収に至る幅広い段階における様々な手続を一元化して行うワンストップショップを設置し、公式参加者を支援する。ワンストップショップにおいては、出展以外にも、宿舎の手配や滞在に関わる各種手続といった生活面でのサポートも行う。

さらに、開発途上国への支援を行う等、より多くの国や国際機関が大阪・関西万博に参加できるようにする。



※国際機関のパビリオン出展については一部を共同館とする場合も想定。
※2020年12月現在の予定。区画数及び面積等は変更となる可能性がある。

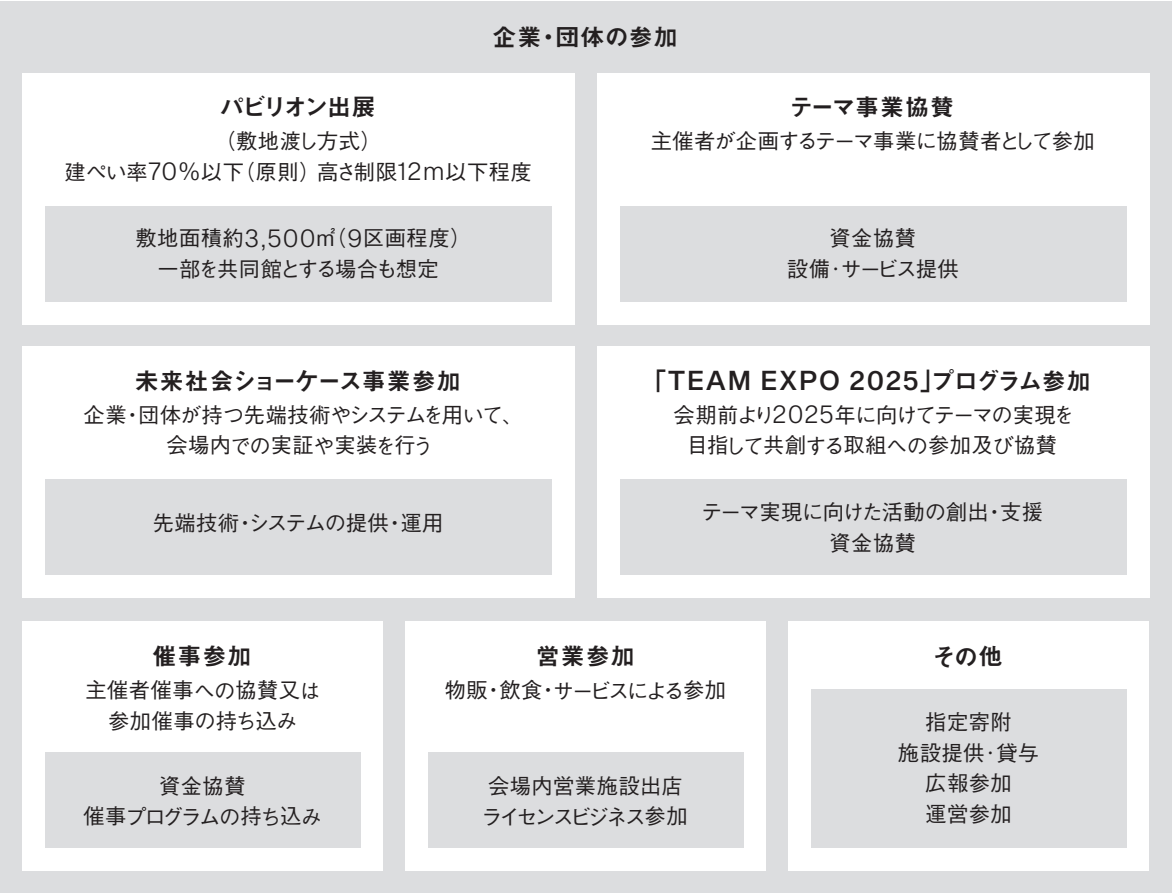
4.2 企業・団体・自治体・市民団体等の参加

企業・団体・自治体・市民団体等の参加者は、ともにテーマの実現を目指すパートナーである。大阪・関西万博では、これまでの万博よりもさらに幅広い参加ができるよう、多様な参加の枠組みを用意する。

企業・団体の参加

多様な参加形態を用意

企業・団体の参加は、パビリオン出展、テーマ事業協賛、未来社会ショーケース事業参加、「TEAM EXPO 2025」プログラム参加、催事参加、営業参加等がある。パビリオン出展は9区画程度を設け、一部を共同館とする場合も想定する。

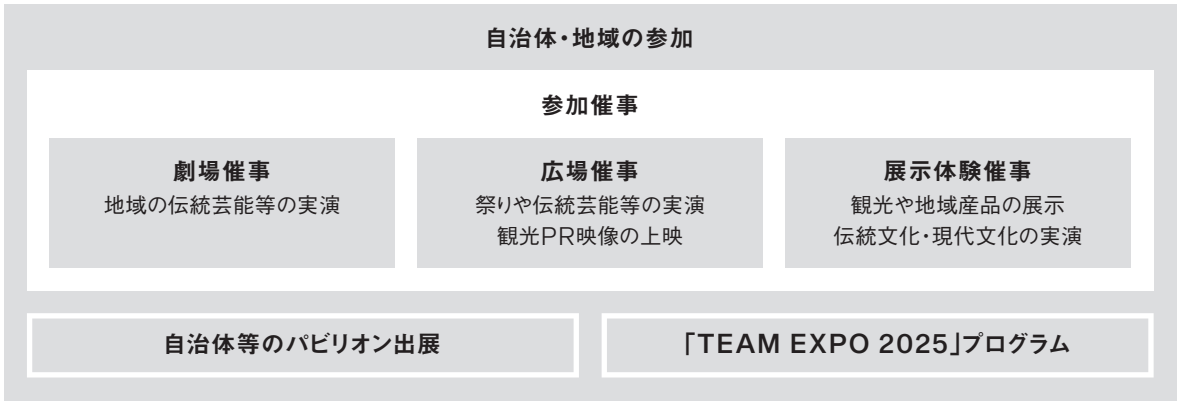


※2020年12月現在の予定。区画数及び面積等は変更となる可能性がある。

自治体・地域の参加

地域のPRと連携を促進

全国各地の自治体・地域からも広く参加できるよう、パビリオン出展や「TEAM EXPO 2025」プログラムに加え、参加催事において受け入れの枠組みを用意する。



地域の各所で行われる様々な活動との連携

機運醸成や地域の魅力に触れる機会を創出するため、大阪・関西万博のステークホルダーである自治体等が主体的に展開する万博関連事業等との連携を想定し、会期前及び会期中に「TEAM EXPO 2025」プログラム等、全国的に本万博に関連する自治体や地域のイベントの開催を促進するようなスキームを設計することを検討する。例えば、瀬戸内海沿岸地域のイベントと連携した相乗効果を生み出す仕組み等を検討する。

関西広域連合との連携

関西府県と政令指定都市で構成する関西広域連合による取組や意欲ある関西の自治体が大阪・関西万博会期中に各地で主体的に実施する万博関連事業等との連携を図ることにより、テーマの実現に貢献する関西の魅力・活力を世界に発信していく。

NGO/NPO、市民団体の参加

繋がりの創出

「TEAM EXPO 2025」プログラムに加え、NGO/NPOや市民団体が大阪・関西万博に幅広く参加する機会が得られるよう、参加催事及び運営参加において受入の枠組みを用意する。



5

第5章 会場計画

5.1 会場デザインコンセプト

多様でありながら、ひとつ

現代は多様性の時代である。同時にそれは、残念なことに分断の時代となる危険をはらんでいる。世界各地の様々な文化やライフスタイルが一箇所に集まるこの万博という場において、豊かな多様性を称賛すると同時に、分断を超えた繋がりを体験することができれば、それは未来への希望となるだろう。この会場デザインは、誘致のコンセプトから引き継ぐ「非中心・離散」の理念によって多様性を鼓舞し、そこに「つながり」を重ね合わせる。多様であり同時に一つであること。無数の異なるものたちが一つの世界を共有しているという感覚を来場者が体感することができるような場を目指すこととする。

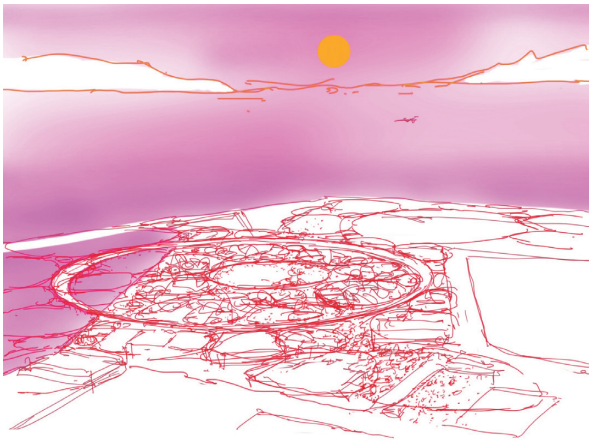
ひとつの空

その「つながり」を象徴するものとして
「ひとつの空」を提示したい。
この空は、世界中が見上げている空である。
一つの空が世界をつなぐ。
世界の人々が一つのものを共有している。
多様でありながら、ひとつである。
そんな「ひとつの空」をこの万博会場に据える。



海と空と地の万博

夢洲は海に囲まれた万博会場である。
海の一部を囲いとって会場デザインに取り込む。
来場者が見上げるひとつの空を切り取る。
そして地上では様々なパビリオンが様々な自然と共に
「非中心・離散」に点在する。



明快な動線と多様な場を「非中心・離散」で配置する

会場全体を巡る主動線は、
わかりやすく、同時に様々な情景が生まれるように
円環状にデザインしている。
主動線に沿って様々な大きさの広場が点在し、
体験の抑揚が生まれる。
広場ではイベント等のにぎわいが企画される。









会場配置計画



会場配置計画

（2020年12月時点）

色凡例

- A 企 タイプA（国・民間企業）
- B 国 タイプB（国・国際機関）
- C タイプC
- テ テーマ館
- 営 営業施設
- 催 日本館、催事施設等
- サービス/管理施設
- 休憩所、トイレ
- 大屋根（リング）
- 水盤類
- 空地、緑地

※ 今後の調整状況により、現在の配置計画については、変更が生じうる。

0m 20m 100m 200m 500m 1km


夢洲駅（仮称）
営業
自治体等
（大阪館含む）
熱供給施設
ゲート施設
エントランス広場
企業1
東エントランス
大屋根
（リング）
A49
B7
A50
企業2
企業3
企業4
企業5
営業
ゲート施設
B13
B11
B12
B10
A16
A4
日本館
大催事場
管理施設
営業
小催事場
庭園
迎賓館
管理施設
VIP・サービス
ゲート施設
供給処理施設

5.2 会場構成

会場エリア

埋立工事や地盤条件等を考慮し、万博会場を以下の3つのエリアに分けて構成する。

パビリオンワールド
パビリオン等の施設が集まるにぎわいのエリア。
大屋根（リング）と地上レベルで異なる景観が楽しめる。

ウォーターワールド
水景を活用した憩いのエリア。
水辺に面して飲食施設を配置するとともに、水上イベントの舞台としても活用する。

グリーンワールド
会場の西側の海に面した緑地エリア。
屋外イベント広場や交通ターミナル、エントランス広場等大人数が滞留することのできる開けた空間とする。

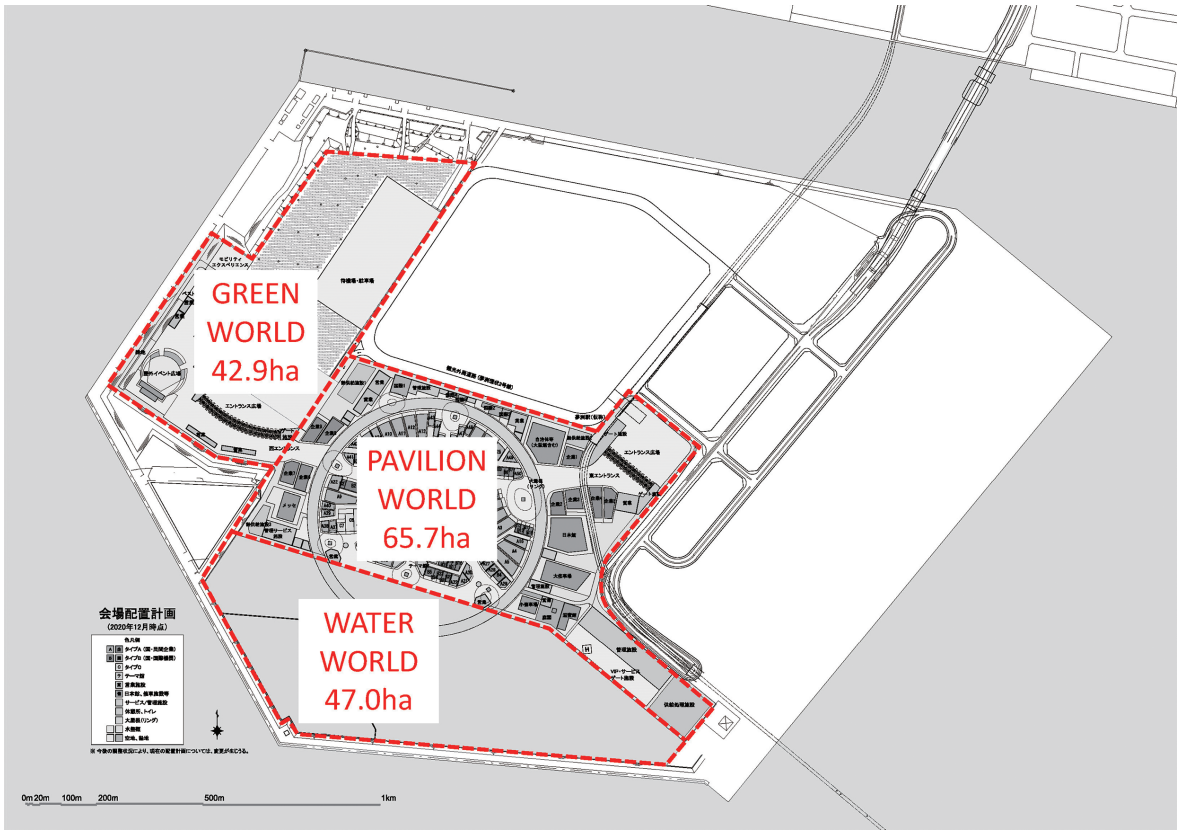


図　会場エリア

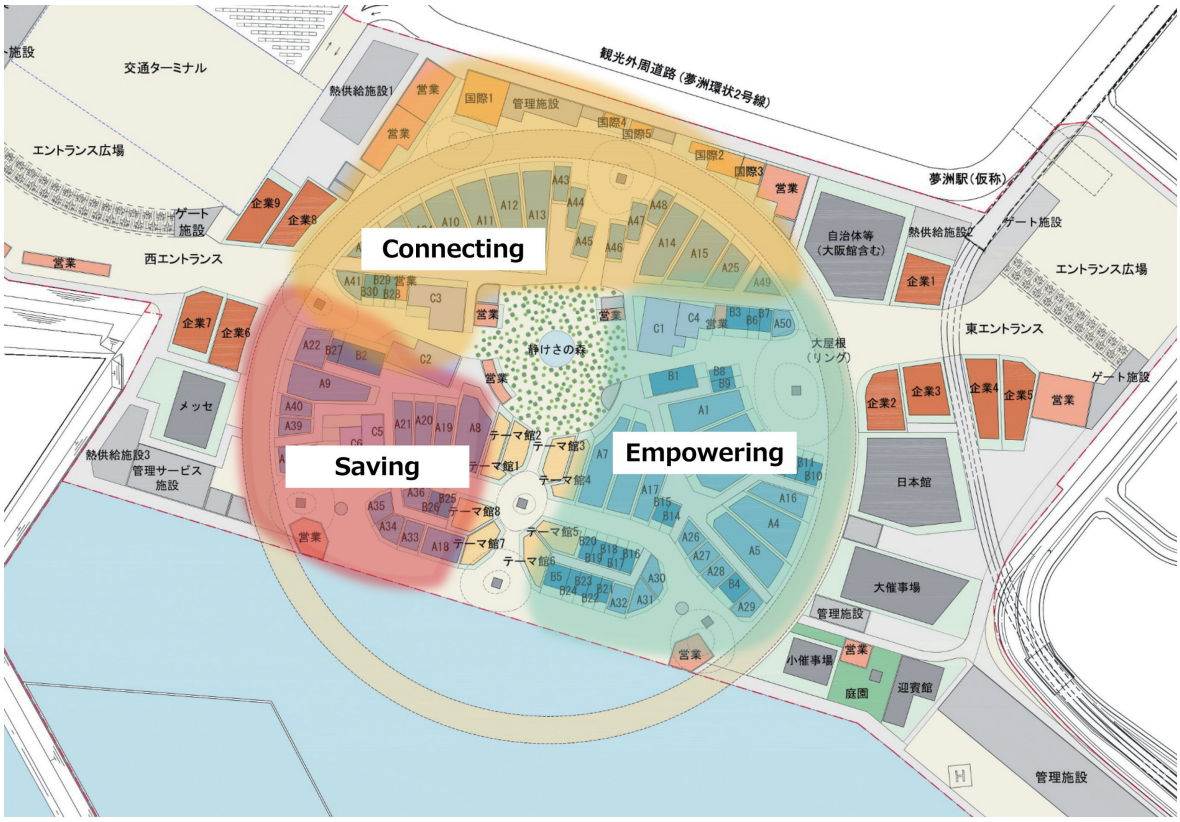
パビリオンワールドのゾーニング

パビリオンワールドは、3つのサブテーマでゾーニングされる。

3つのサブテーマゾーン

各サブテーマとの関連性によって公式参加等を配置分けする。

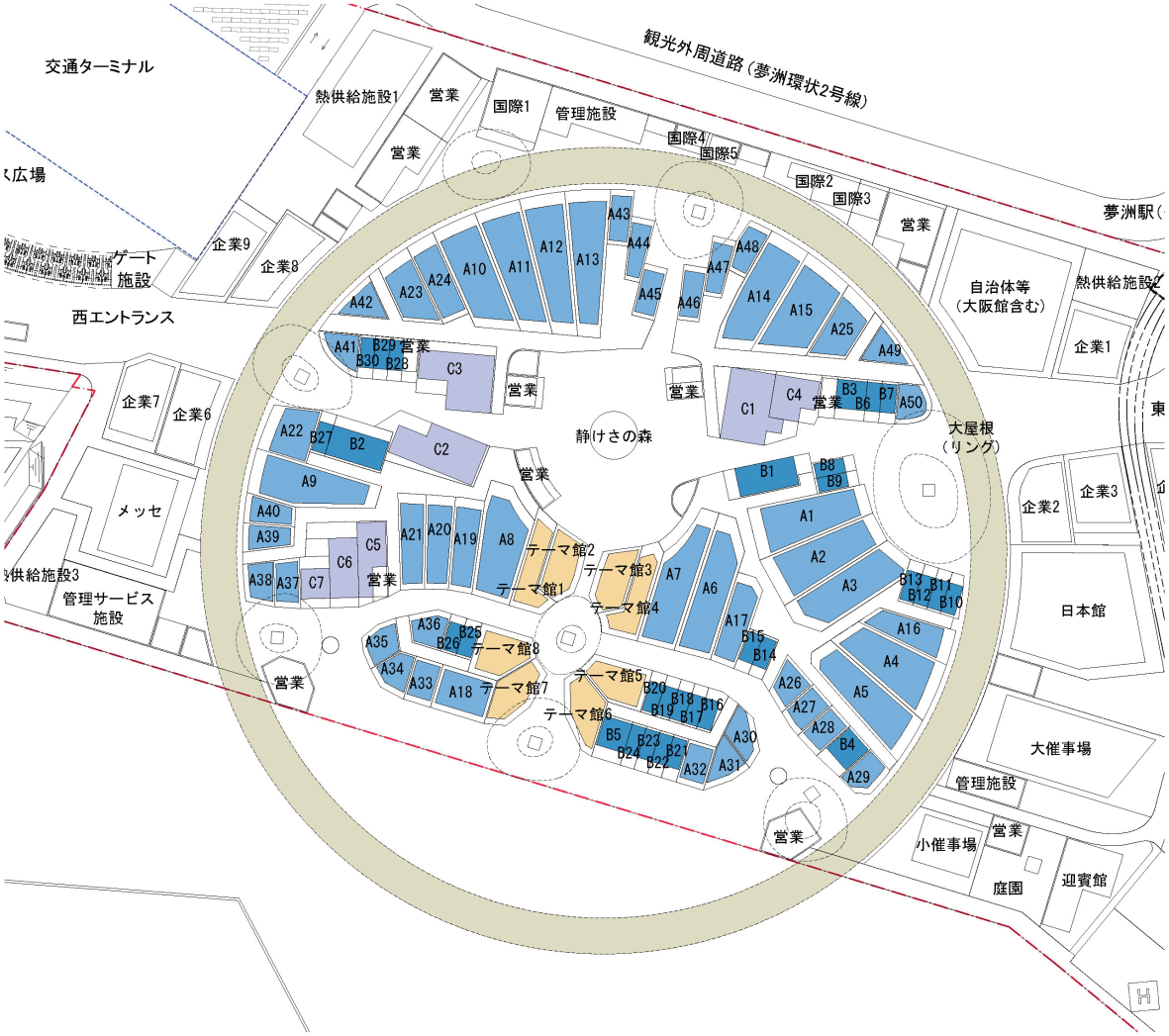
Saving Lives Zone	Empowering Lives Zone	Connecting Lives Zone



※具体的なゾーニング区分については参加国の意向を踏まえ、今後検討していく。

5.3 施設計画

パビリオンワールドの主要施設は、以下のとおりとする。



パビリオン タイプA（敷地渡し方式）

主催者が参加者に敷地を渡し、その中で自由に形状やデザインを構成するパビリオンである。参加者は大阪・関西万博終了後パビリオンの解体・撤去を行い、引き渡し時と同様の状態に戻す責任がある。汚水、雨水排水、上水、電気、通信等のユーティリティ（供給管路）については、敷地境界までは主催者が設置する。ユーティリティへの接続と敷地内の整備は参加者の責任とする。

パビリオン タイプB（建物渡し方式）

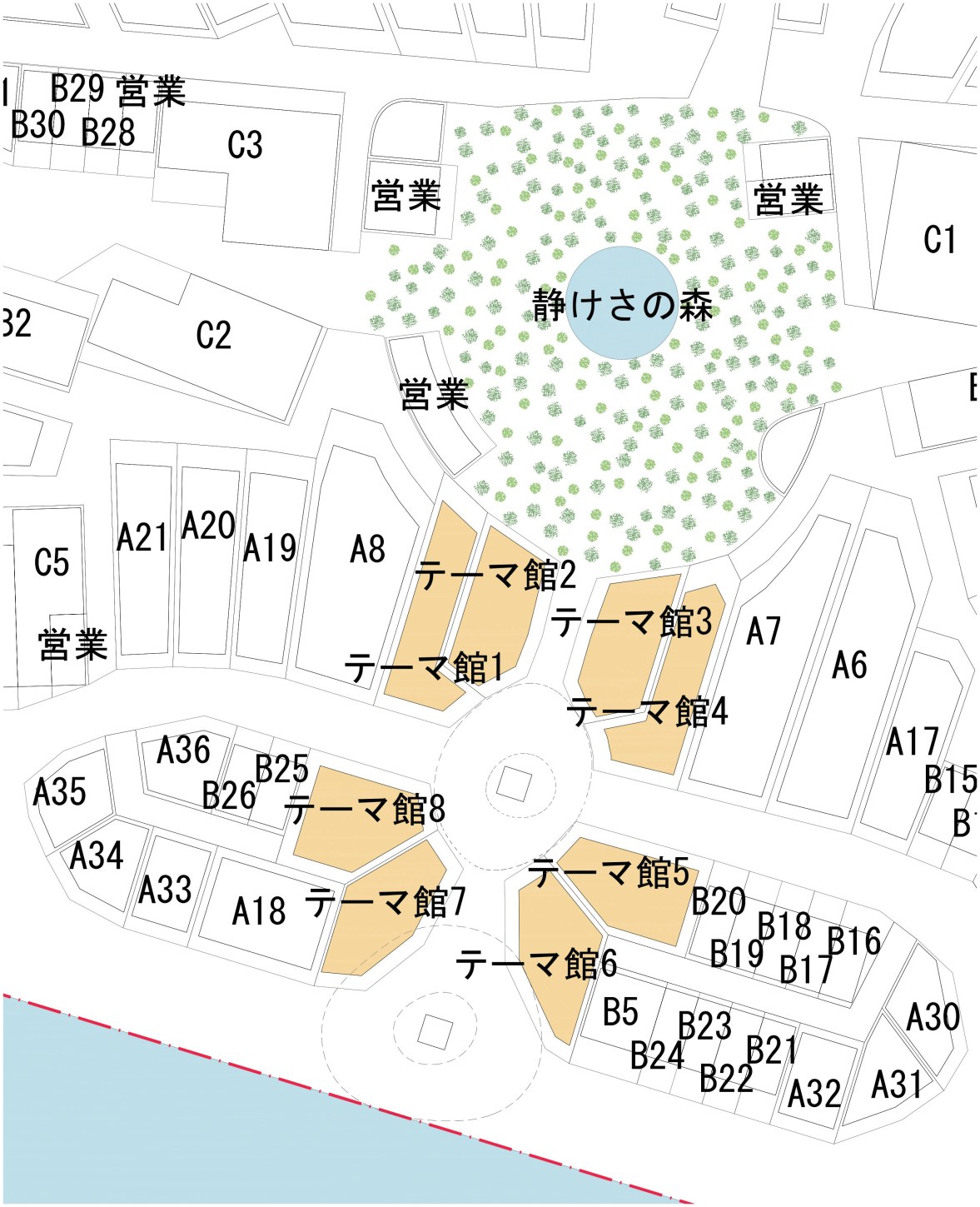
主催者が建築し、参加者のパビリオンとして提供する。参加者はパビリオンを借り受け、コンテンツを自由に決定し、自ら展示設備や内容、展示空間を作り上げる。参加者はパビリオンの内装や外装をデザインすることができる。パビリオンには汚水、雨水排水、上水、電気、通信等のユーティリティを完備する。参加者の設備をユーティリティへ接続することは参加者の責任とする。

パビリオン タイプC（共同館方式）

参加者はパビリオン内の一部区画を借り受け、自ら展示設備や内装を行って展示空間を作り上げる。共同館は、区画を自由に区切ることができるような設計とする。パビリオンには、汚水、雨水排水、上水、電気、通信等のユーティリティを完備する。参加者の設備をユーティリティへ接続することは参加者の責任とする。

テーマ館（8つのテーマ事業）

テーマ展示のパビリオンは、パビリオンワールド南側の水際から中央の「静けさの森」を結ぶラインの両側に向かい合って配置される。「いのち」をめぐる8つのテーマ展示が、それぞれ独立しながらも連携し、共鳴し合って大きなストーリーを描くことができるように、隣接した配置としている。水際から静けさの森までパビリオンの置かれる環境と展示が共鳴して幅の広い体験を生み出す。



※2020年12月現在の予定。区画数及び面積等は変更となる可能性がある。

パビリオンワールドの主動線（メインストリート）

パビリオンワールドのパビリオン等各施設は、パビリオンワールド内のリング状のメインストリートと、メインストリートにつながるように離散的に配置する広場に面している。このメインストリートがパビリオンワールドの主動線となり、来場者はこの明確でわかりやすい主動線を移動して、パビリオン等の各施設にアクセスすることができる。

この主動線（メインストリート）の上部には大屋根（リング）を設置する。この大屋根（リング）は来場者を雨や日差しから守る機能を持ち、人々を導くナビゲーションの役割も果たす。大屋根（リング）の上には空中歩廊が巡り、パビリオン群が立ち並ぶ会場を俯瞰する視点を提供し、場所によっては斜面や段々、また海を望む展望歩廊を用意して、人々が思い思いに過ごすことができる居場所をデザインする。

静けさの森

万博会場の喧騒の中にあって、ひときわ静かで落ち着ける場所として静けさの森を検討する。木々によって日差しから守られ、ゆっくりと休憩することができるこの静けさの森は、主動線（メインストリート）から離れた、奥まったところに配置され、主動線から4つの異なるルートでアクセスすることができる。森に面して営業施設を配置し、またテーマ館のいくつかが森へと開く構成をとることもできる。

ウォーターワールド

ウォーターワールドは海の上の万博会場を象徴する場所である。堤防によって作られた内海をさらに大屋根（リング）によって囲い取ることで「海の広場」を作り出す。この三日月状の水辺空間は水上イベントを始めとした親水空間での様々な活動に供される。内海に張り出した大屋根（リング）の上は展望歩廊であり、「海の広場」や会場全体を見下ろせる場所であり、南西方向に広がる瀬戸内の海を見渡せる場所ともなる。

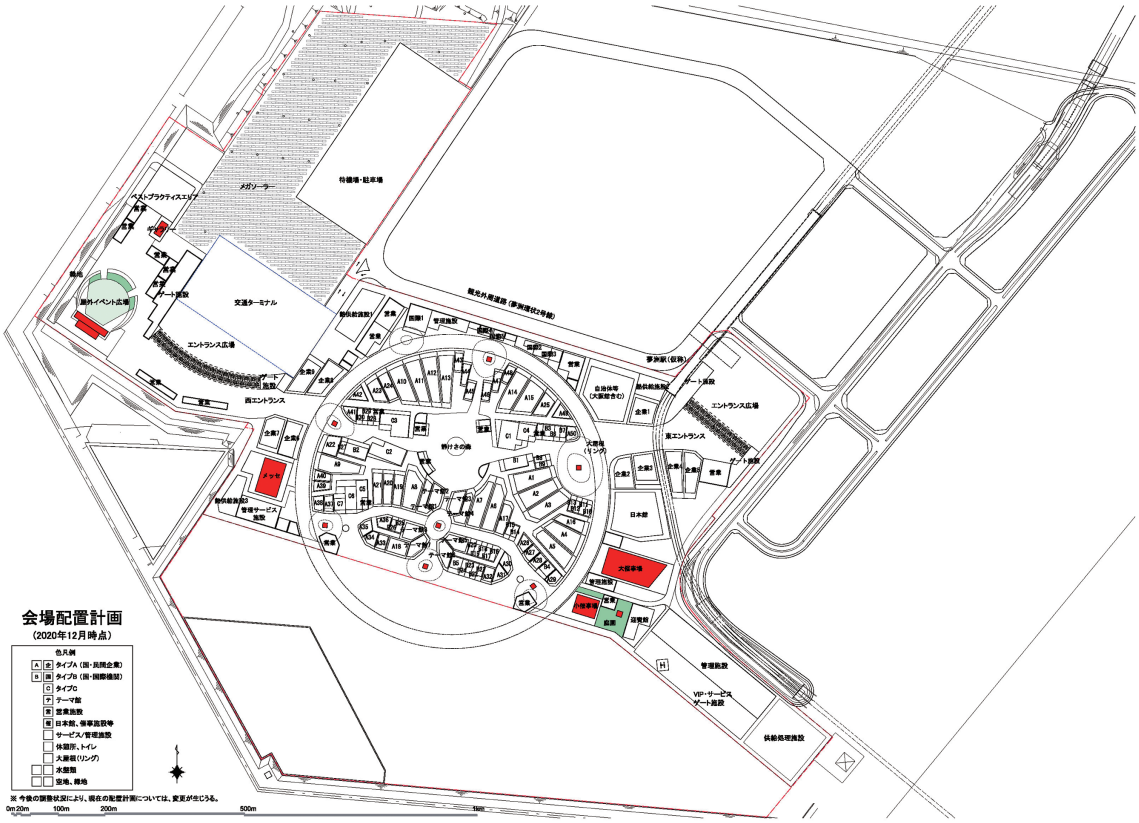
グリーンワールド

グリーンワールドは、密度の高いパビリオンワールドと対照的に、開放的で緑あふれる空間とし、万博体験の幅を広げる役割を持つ。屋外イベント広場や、ベストプラクティスエリア、先進的なモビリティを体験するエリア等が配置される。西向きに瀬戸内の海を直接望むことができる場所でもあり、レストラン、物販施設及びギャラリーを適切に配置することによって海の上の万博会場を満喫することができる。



催事施設

会期中に行われる様々な催事に対応できるよう、パビリオンワールドに催事施設、メッセ、小型のステージ、庭園、グリーンワールドに屋外イベント広場、ベストプラクティスエリア、ギャラリーを設置する。



エントランス広場

会場の東西に地下鉄夢洲駅(東)、交通ターミナル(西)からアクセス可能なエントランス広場を整備する。エントランス広場には、入場券対応窓口、セキュリティチェック及び入場ゲートを配置するとともに、計画日来場者数[9]28.5万人/日におけるゲート等での待ち行列に対応できる安全性の確保に努める。

9 1日当たりの来場者数の予測において、約6ヵ月の開催期間のうち上位10%の平均来場者数(予測値)。

表　主な施設の面積（想定）

施設名	敷地面積(㎡)	延床面積(㎡)
パビリオン タイプA（50区画）	92,500	（敷地渡し）
パビリオン タイプB（30区画）	17,500	11,700
パビリオン タイプC（7区画）	16,700	11,400
国際機関（5区画）	7,100	4,800
テーマ館（8区画）	13,300	（未定）
民間パビリオン（9区画）	31,500	（敷地渡し）
日本館	12,900	（敷地渡し）
自治体等（大阪館含む）	12,900	（敷地渡し）
催事施設・メッセ・ギャラリー	24,100	14,000
迎賓館・庭園	9,200	（未定）
営業施設	27,700	26,000
管理施設等	74,700	65,700

※2020年12月現在の予定。区画数及び面積等は変更となる可能性がある。

原則、施設については、景観を保ち、より快適な空間づくりをおこなうため、建ぺい率70％以内とし、敷地境界からのセットバック等の詳細を建築ガイドラインで提示する。また、高さ制限（12m以下程度）を検討する。

会場内輸送

会場内での来場者の移動については、徒歩を主な手段として想定するが、高齢者、障がい者、子連れの家族等、様々な来場者が快適に会場内を移動できるように、また先進的なモビリティを体験する機会を得られるよう、多様なモビリティを導入する。また、これらを来場者が便利に利用できるよう、統合的な情報サービスを提供する。

このほか、物資及び廃棄物の運搬等についても、先端技術を活用しつつ効率的な輸送を実現する。

❶外周トラム

主に会場の東西を結び、東西のエントランスや屋外イベント広場等の間を行き来できるよう、会場の外周道路を主な走行ルートとするモビリティ（乗車可能人数:数十人程度 / 台）を導入する。

❷小型モビリティ

誰もが会場内を快適に移動できる手段を提供するとともに、高齢者や障がい者等の移動制約者を支援するため、会場内の街路を主な走行ルートとするモビリティ（乗車可能人数:1～数人程度 / 台）を導入する。

❸空飛ぶクルマ

先進的なモビリティの体験機会を提供する一環として、空飛ぶクルマの導入を検討する。空飛ぶクルマはグリーンワールドに設けた離発着ポートで離発着することを計画する。



図　会場内輸送計画の概要

5.4 会場整備

大阪・関西万博の会場整備にあたっては、計画日来場者数28.5万人/日を想定して行う。さらに来場者が安全かつ快適に万博体験を楽しめるよう、必要となる供給インフラ、諸施設を確実に整備する。なお、SDGsの達成に繋がるような先進技術の導入に向けて検討を行うほか、以下の点に留意する。

デザイン性（美しい会場）

会場に計画される全ての施設は高いクオリティでデザインされるべきである。それは会場での体験の質を左右する。催事、迎賓館等の主要な施設、休憩施設、トイレ等の小規模な施設の設計、またランドスケープ、ストリートファニチャー、サイン計画等に、優れたデザイナーやクリエイターが参画することができる仕組みを検討する。デザインは機能性・美・施工性・コスト、また会期後のリサイクル等も含めたトータルの質の高さを求めるものとする。

機能性（使いやすい会場）

会場は、上部に大屋根（リング）のかかる主動線（メインストリート）に沿って明快に構成し、主動線をめぐる体験が単調にならないように、適切に広場を点在させ、わかりやすさと多様な体験を両立する。大屋根（リング）は、それ自体が日射と雨を防ぐ機能を有する。また、主動線以外の動線空間にも、日除けを適切に配置する。

全てのパビリオンにサービス動線のアクセスを確保し、サービス動線と来場者動線の交錯は最小限とする。

ユニバーサルデザイン

国・地域、文化、人種、性別、世代、障がいの有無等に関わらず、大阪・関西万博を訪れる世界中の人々が利用しやすいユニバーサルデザインの実現を目指す。そのために、会場施設設計者、展示設計者、運営者等、本万博の整備及び運営に携わる多くの関係者の共通指標となるガイドラインを策定し、利用者にとって快適な環境整備を行う。

環境配慮・暑さ対策

建築物の設計・建築にあたっては、建築環境総合性能評価システム（CASBEE）[10]の活用等により、環境に配慮した会場を目指す。

また、夏季の暑熱環境改善のため、会場レベル、建築レベルの各階層において総合的な暑さ対策を行う。

10　建築物の環境性能を評価し格付けする手法。省エネルギーや環境負荷の少ない資機材の使用といった環境配慮はもとより、室内の快適性や景観への配慮等も含めた建物の品質を総合的に評価するシステム。CASBEEはComprehensive Assessment System for Built Environment Efficiencyの略。

5.5 基盤設備

上水道・下水道（汚水・雨水排水）

上水道は、会場用地内に受水槽を設け各施設に対して配水することで、安全な水を来場者に安定的に供給する。下水道は、汚水発生量の時間変動に応じた貯留施設等を設け確実に排水・処理するとともに、雨水についても適切に対応する。

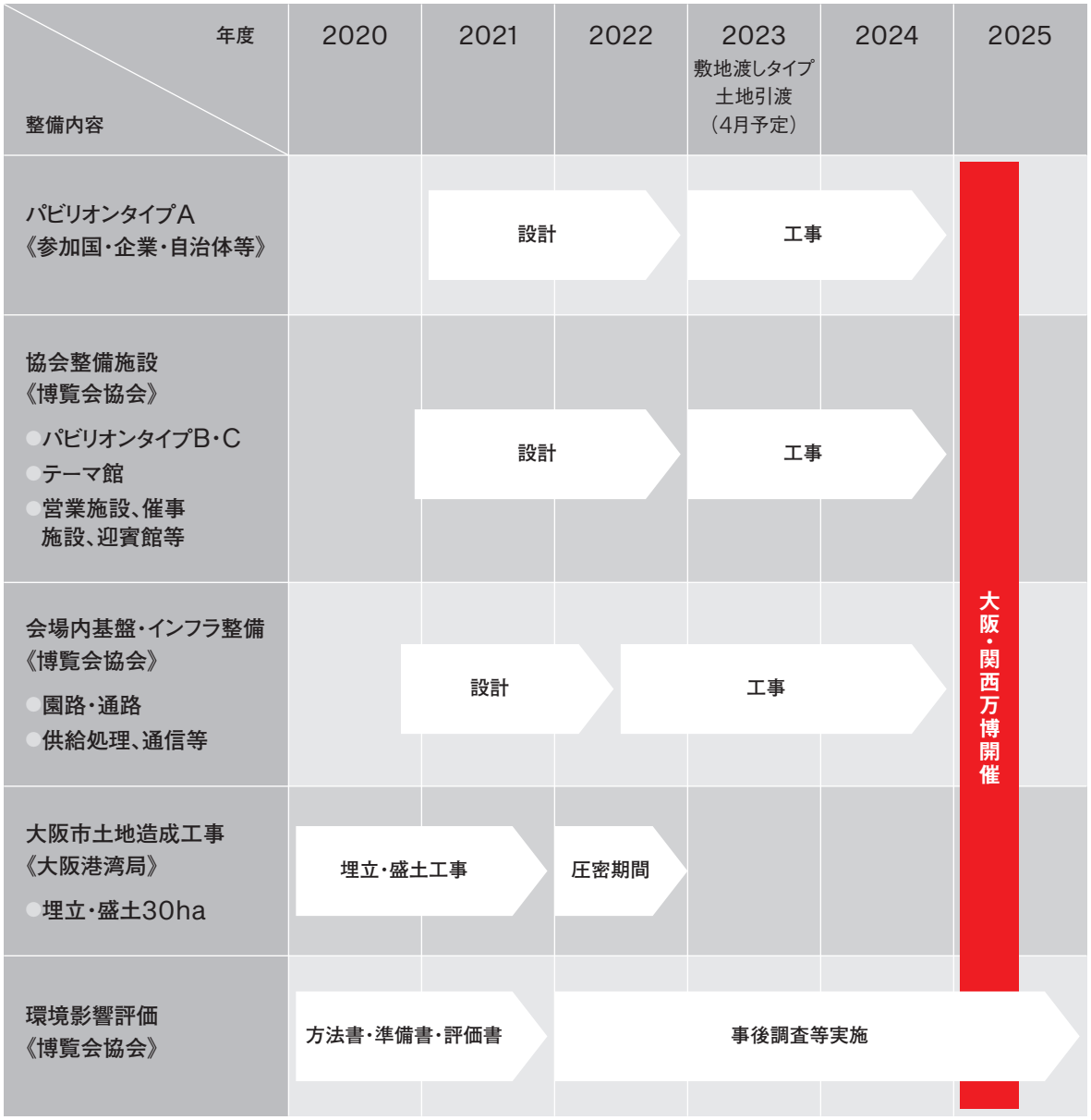
電気・ガス・熱供給設備

会場の立地に適した再生可能エネルギーや最新の省エネルギー・環境技術等の導入を検討するとともに、設備容量や供給ルート等の最適化を図り、効率の良い供給システムとすることを計画している。

電気及びガスについては、合理的で機能性、信頼性、安全性の高い供給システムを導入する。また、半年間という短期間の開催であるため、経済性も考慮した供給方式を検討する。

熱供給については、エネルギーリスク分散化を考慮し、電気及びガスを併用した供給システムとする。

5.6 会場整備スケジュール



※2020年12月現在の予定。　※《 》内は実施主体。

6

第6章　運営計画

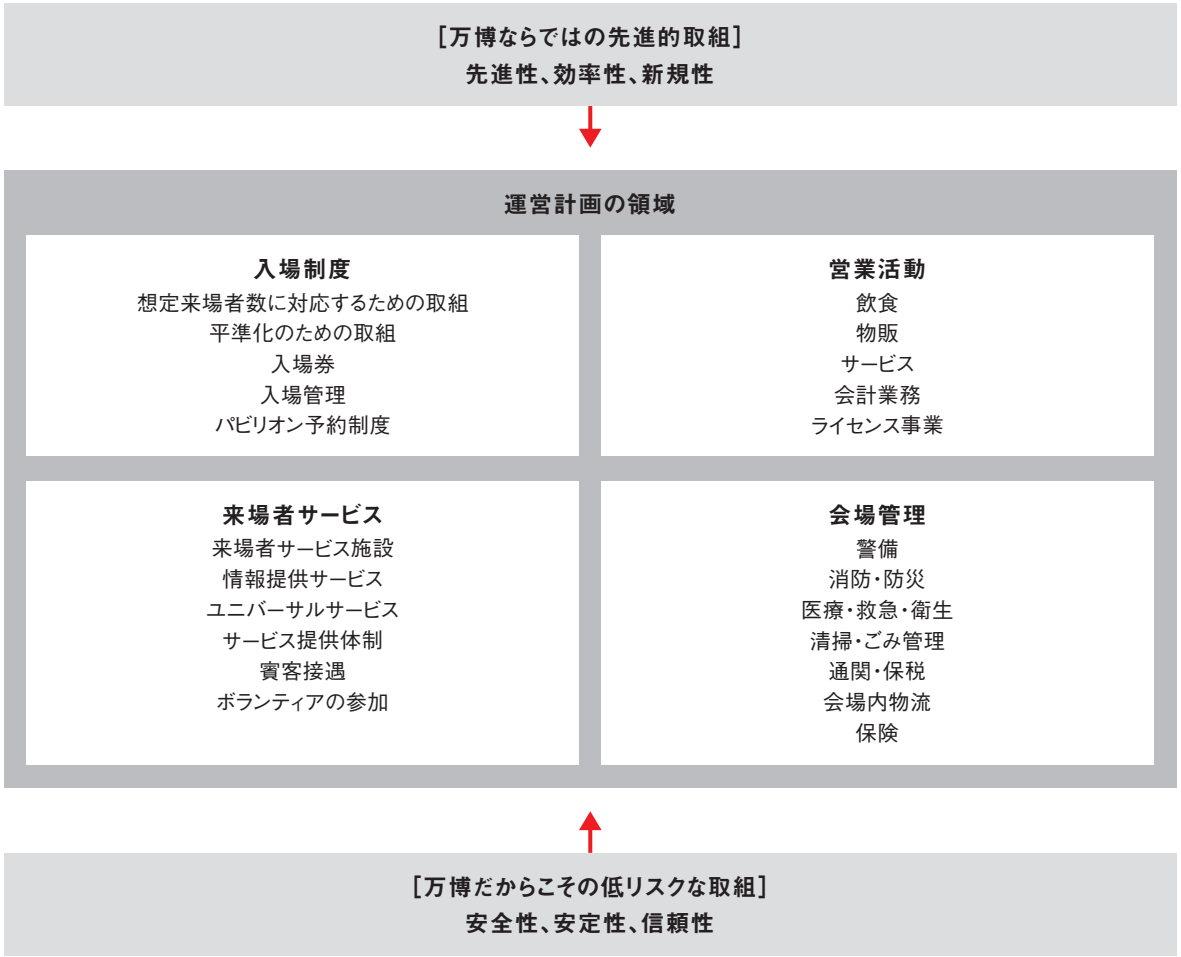
6.1 運営計画の構成

大阪・関西万博における運営計画は、万博ならではの先進的取組と、万博だからこその低リスクな取組の両面から検討し、最適な手段を導き出すよう計画する。

主な運営計画の方針は以下のとおり。

- 計画日来場者数として想定している28.5万人が来場する場合でも過剰な混雑が生じないように、デジタル技術を活用した入場制度等において平準化策を講じる。入場券の電子化による来場者サービス及び管理を行うことにより快適性や安全性を高めていく。
- ロボット等の先端技術を活用して効率的な運営を行う。
- 災害や感染症等に備えた低リスクな運営を行う。

また、運営計画の領域を以下のとおり構成する。

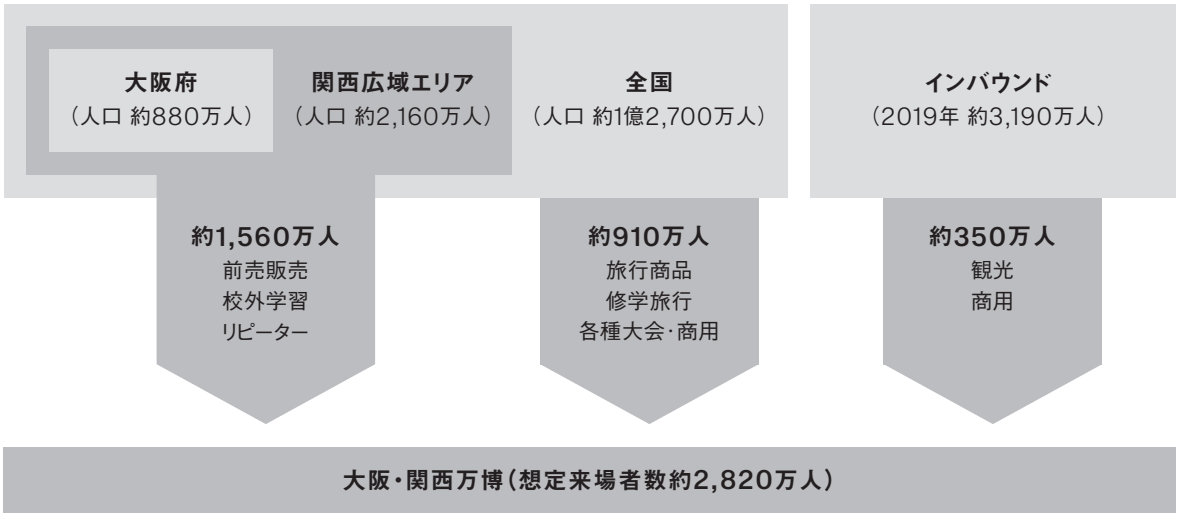


6.2 入場制度

大阪・関西万博の入場制度は、これまでの万博における取組の成果やノウハウを活かしながら、デジタル技術を取り入れ、来場者の快適性と多様なニーズに対応するための新たな手法を構築する。

想定来場者数に対応するための取組

大阪・関西万博の想定来場者数約2,820万人に対応するために、地域ごとの来場スタイルに応じた取組を行う。



開会2年程度前からの入場券販売

約2,820万人の来場者を迎えるには、これまでの万博同様、会期前の入場券販売が重要となる。前売販売は開会の2年程度前から開始することを検討する。

関西広域エリアからの来場促進

大阪府の人口約880万人に対し、関西広域エリアの人口は2,100万人以上となる。こうした人口の多さを活かして、想定来場者数約2,820万人を実現できるよう、関西広域エリア各自治体の協力を得て来場促進に取り組む。

校外学習や修学旅行等での来場促進

大阪・関西万博が掲げる「いのち輝く未来社会のデザイン」や「SDGs達成・SDGs+beyond」、「Society5.0」は、小中学生及び高校生の社会科と、「People's Living Lab（未来社会の実験場）」は理科や科学と、公式パビリオンは国際理解等との関連性が高く、校外学習や修学旅行の場としてふさわしい。学習テーマに応じたエクスカーション等のプログラムを設け、学校の来場を促進する。

MICEを含む各種大会・商用での来場促進

会場内において、企業等の会議（Meeting）やインセンティブ旅行（Incentive Travel）、国際機関・団体等が行う会議（Convention）、展示会イベント（Exhibition/Event）等のMICEを含む各種大会の実施や、販売店や得意客の招待、先端技術等の視察・商用での利用を通じて、全国、全世界からの来場を促進する。

インバウンドの来場促進

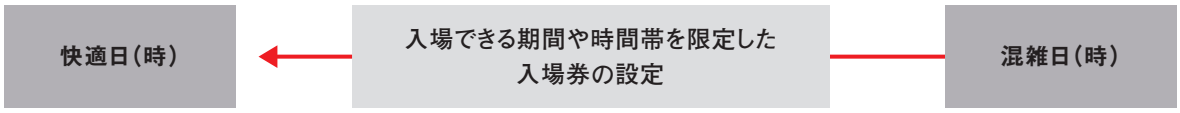
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、2019年度に3,000万人を超えていた訪日外国人観光客（インバウンド）は大きく減少したが、今後の感染症対策の進展によっては再び回復することも期待できる。

BIEに提出した登録申請書に記載した約350万人の海外来場者は、2025年に5,000万人のインバウンドが実現しているとの想定のもとで試算したものであるが、今後の推移を見守りながら、開催時の状況に応じて最大限の集客を実現できるよう対応を講じていくこととする。

平準化のための取組

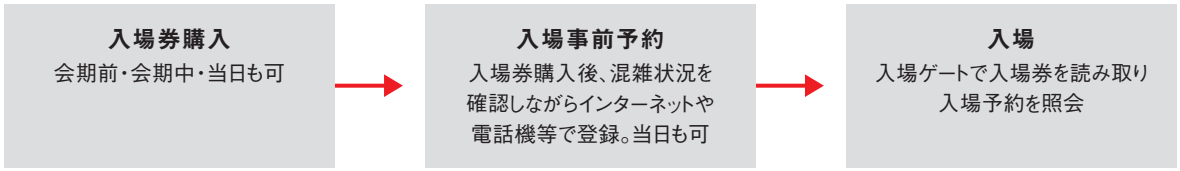
混雑緩和効果が期待できる入場券の設定

来場者の安全性・快適性を保ち、混雑が予想される日や来場者が集中するピーク時間帯の混雑を緩和するために、入場できる期間や時間帯を限定した入場券の設定を検討する。



入場事前予約制度

会場や道路・交通機関の過剰な混雑を緩和し、1日あたりの来場者数の平準化を図るために、「入場事前予約制度」の導入を検討する。入場事前予約制度を導入することで、事前に混雑度を予測することができるようになるため、来場者は混雑する日を避けて来場することが可能になる。また、主催者等は運営体制や食材の準備等を効率的に行うことができるようになる。



入場券

電子チケットの導入

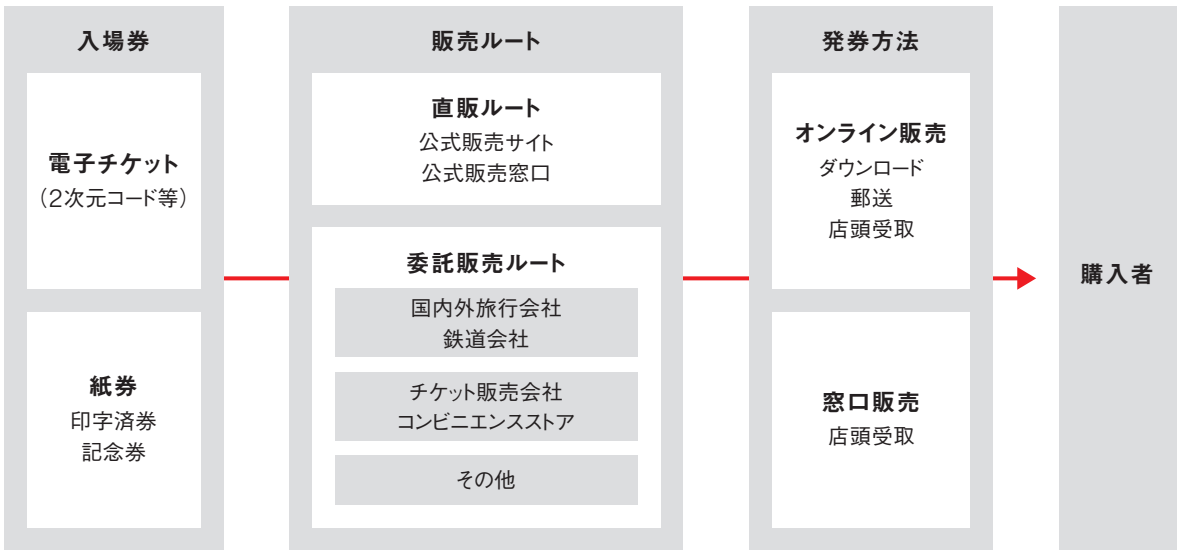
デジタル化の進展に伴い、多くのコンサートやスポーツイベント等の入場において「電子チケット」が用いられるようになった。この情勢は今後も加速することが予測されるため、2025年に開催する大阪・関西万博においては電子チケットを積極的に用いる。

他方で、電子チケットは全ての人が利用できるわけではないため、紙等を補助的に用いる。また、電子チケットとは別に、形あるものとして保存できる記念チケット等の発行を検討する。

電子チケットに最適化した販売ルート

入場券の電子化を導入することで、販売ルートもそれに最適化させる必要が生じる。従来の万博では、紙等の入場券を金券として厳重な管理のもと輸送・保管・販売する必要があったが、電子チケットの導入によりこれらのコストをシステム費等に充当することで、コスト面の合理化を図る。

さらに電子チケットを導入することでオンライン販売を活用することが可能となるため、国内外の旅行会社や鉄道会社に加え、チケット販売会社やコンビニエンスストア等多彩な販売チャネルを構築することとする。



入場管理

電子チケットのメリットを活かせるゲート認証システム

会場を訪れる来場者の入場を円滑に行えるよう入場ゲートの個数、認証方法、セキュリティ検査等の方法を工夫する。

認証方法については、電子チケットのメリットを活かせるデジタル技術の導入を、費用対効果も考慮しながら検討する。

また、入場待ちによってゲート周辺での雑踏事故が生じないよう考慮して、ゲート前後の面積を計画するとともに、来場者がゲート前で滞留しないよう、事前の入場予約情報に基づく混雑予想情報についてインターネット等を用いて提供する。

効率的な業務用入場管理

会場で働くスタッフや各パビリオン関係者等、万博の業務用入場は膨大な人数となる。特に催事の出演者等は毎日入れ替わるため、これらの入場管理を円滑に行えるよう、業務用IDの発行手続及び業務用ゲートの認証方法の効率化を図る。

パビリオン予約制度

十分な規模のパビリオン予約枠の確保

2005年に開催された愛・地球博でもパビリオン予約制度を導入したが、予約枠は1日あたり2万人分程度と十分な量には届かなかった。大阪・関西万博では、来場者の快適性と平準化に資することができるよう十分な規模のパビリオン予約枠の確保を目指す。

そのために、パビリオン予約制度を導入する公式パビリオン、民間パビリオン出展者に対し、十分な受け入れ枠の確保を呼び掛ける。



6.3 営業活動

飲食

食品ロスの削減と多様な来場者への対応

大阪・関西万博の飲食施設は、SDGsの目標としても掲げられている食品ロスの削減に積極的に取り組む。入場事前予約制度と連動した需要予測、セントラルキッチン機能の活用による食材の共通化等で食品ロスの削減に取り組む。

また、子どもから高齢者、障がい者、外国人、賓客等、多様な来場者に適応したサービスや商品の導入も検討する（例:ハラル、ヴィーガン、刻み食対応、点字メニュー、アレルギー物質の表示等）。

飲食施設の構成とキッチンカーによる混雑日対応

基本となる飲食施設は、万博に求められる賓客用ラウンジと大勢の来場者に対応できるフードコート型レストラン及びテイクアウト店を中心に構成する。非混雑日の来場者数に対応可能な施設規模とし、混雑日はキッチンカーや飲食イベントで対応する。

また、フードコートの客席部分を営業出店者の専有面積に含めず共用エリアとすることで、学校団体の待ち合わせや校外学習用エクスカーションの場所等に有効活用する。

賓客用ラウンジ
万博にふさわしい一流の料理とサービス、品格あるゆったりとした空間を提供する賓客用ラウンジ

ファミリーレストラン
多様な客層に対応できるフルサービスレストラン

テイクアウト・カフェ ファストフード
グリーンワールドや会場内に分散して配置

フードコート
セルフサービスにて多数のお客様に対応できる大型の店舗を中心に展開

様々な軽食を選択でき、多様なお客様に対応できる演出性に富んだラインナップ

非混雑日に対応できる席数を確保

セントラルキッチン機能の活用による食品ロス削減に取り組む

客席部分は共用エリアとして有効活用

＋

キッチンカー 飲食イベント
混雑日はグリーンワールドにキッチンカーを配置

大衆向けや世界・関西のグルメ集結等、飲食イベントも検討

物販

来場者の様々なニーズに対応できるよう、ロゴマーク等の商品を展開する公式記念品ショップを核に、大阪・関西万博にふさわしい地域の品を取り揃えた物産店や、各種物販店舗を配置するとともに、コンビニエンスストアを会場内に分散配置し、来場者の利便性を高める。

公式記念品ショップ
ロゴマーク等の商品を
中心に取り揃えたショップを
ゲート付近や会場内に配置

地域物産店
大阪・関西万博にふさわしい
地域産品を販売

一般ショップ
大阪・関西万博のテーマに
ふさわしい商品を販売

コンビニエンスストア
来場者の利便性向上を目的に
会場内に分散配置

サービス

小さな子どもを預かる託児所、憩いを提供するリラクゼーション施設、宅配サービス等、来場者にきめ細やかなサービスを提供する施設を設置する。

会計業務

会期中に会場内外で発生する売上金等の管理のため、現金収受から指定口座入金までの一連の処理業務を行う。その際、現金取扱い・保管における十分なセキュリティの確保を図る。

ライセンス事業

大阪・関西万博のロゴマーク等を付した公式オリジナル商品を企画販売するとともに、ロゴマーク等のライセンスを企業・団体に供与し、商品・景品・広告等に使用できるようにする。また、ライセンスを保護するため、適切な権利保護を行う。

公式オリジナル商品やライセンス商品は会期前からインターネット上でも販売し、大阪・関西万博への期待感を醸成するとともに、地理的・時間的な制約なく購入できる利便性を提供する。

6.4 来場者サービス

子どもから高齢者、障がい者、外国人、賓客等、多様な来場者に対して、利便性や快適性を追求し、有意義で満足度の高い来場者サービスを目指す。

来場者サービス施設

多様な来場者のニーズに応え、大阪・関西万博を快適かつ安心して過ごせるよう、先端技術を用いたインフォメーション（案内所）、忘れ物・落し物対応、迷子対応、車いす等の貸出、授乳室等の乳幼児向け設備、傷病者対応を行う診療所、応急手当所等、充実した来場者向けサービス施設を効率よく配置する。また、機能的な利便性だけでなく、娯楽性に富んだ体験が実現できる施設になるような工夫を盛り込む。

情報提供サービス

ICTを活用し、来場者の志向にあったパビリオン紹介、催事情報、営業施設案内、会場内や交通機関等の混雑状況等をリアルタイムで発信し、来場者へ情報提供を行う。

併せて、アプリやサイネージ等も活用し、来場者にとって有益な情報提供サービスを検討する。

ユニバーサルサービス

バリアフリー・ユニバーサルデザインを考慮するとともに、先端技術を用いることにより、国・地域、文化、人種、性別、世代、障がいの有無等に関わらず、大阪・関西万博を訪れる世界中の人々が快適に本万博を楽しむことができるサービスを提供する。

サービス提供体制

多様なニーズに応えるため、先端技術と共に人的サービスを行う体制を構築し、スマートで行き届いた来場者サービスを提供する。

また、ゲート管理や会場内巡回を行う警備員、場内清掃スタッフ、傷病者対応を行う救護スタッフ等の各種スタッフを適切に配置し、来場者の利便性、快適性の向上を図る。

来場者へ高品質のサービスを提供するため、十分な人員を確保し、多言語や手話対応等の適切な研修を実施すると同時に、ICTによる運営従事者サポートツールを活用できる体制の構築を図る。

なお、万博運営に従事するスタッフやボランティアに対しては適切な厚生（休憩・食事・通勤等）が提供されるよう配慮し、従事者の士気を向上させ、その能力を存分に発揮してより良いサービスが提供できるよう、快適な労働環境を整備する。

賓客接遇

賓客接遇施設（迎賓館等）を設置するとともに、賓客対象者区分に応じた、接遇基準（体制）を整備する。そのうえで、関係機関と十分に連携し、国内外の賓客に対して万博にふさわしい接遇を行う。

ボランティアの参加

大阪・関西万博において、会場内外における来場者サービスにボランティアの参加を取り入れ、本万博のテーマを考慮したボランティア活動を行えるような仕掛け、ボランティアの参加を受け入れるスタッフの配置・体制を検討する。

6.5 会場管理

警備

高性能機器の導入により確実性と効率性を両立させたセキュリティ対策を行う。また、陸路によるゲート管理はもとより、陸路以外からの侵入対策や、サイバーテロ対策も行う。

これらの対策を確実に行うための自主警備体制を確立するとともに、事件・事故に備えて、関係機関と密に連携する。

自主警備体制の確保にあたっては、会場特性及び必要とされる業務内容を勘案し、来場者予測調査、会場内滞留状況の推計、会場内人流シミュレーションの結果、催事計画も踏まえ、適切な機能を有する施設及び体制を確保するとともに、会場の状況に応じたロボット警備の活用を検討する。

利用者に応じたセキュリティレベルの設定

来場者、万博スタッフ及び参加国等スタッフの安全・安心、セキュリティ対策のため、想定される利用者に応じたセキュリティレベルを設定する。

セキュリティゲートの設定

セキュリティゲートでは、高性能機器の導入により高い安全性・プライバシーの確保と、セキュリティチェック時間の短縮との両立を図る。

迅速な非常時対応が可能な体制の構築

会場内で非常事態が発生した際に迅速な対応が可能な自主警備体制の確保、警備拠点の配置を行うとともに、非常時対応のための万博スタッフ及び参加国等スタッフの訓練を行う。

消防・防災

会場内での災害を未然に防止するとともに、万一災害が発生した場合には消防活動や避難誘導を円滑に行い、被害を最小限に抑えるための措置を講じる。

火災や自然災害等に対し、自治体が定める地域防災計画やハザードマップ等に示される災害・被害の想定を考慮した上で具体的な計画を策定する。また、会場内には消防・警察・警備の拠点を整備するとともに消防車や救急車の配置を行い、関係機関との連携を密にしながら災害対応にあたることができる機能・体制を構築する。併せて、万博スタッフ及び参加国等スタッフへの計画の周知徹底・訓練の実施等、必要な措置を講じる。

すべての来場者が安全に避難できる体制

ICTを活用した迅速かつ正確な情報発信により、来場者を安全に避難誘導する。多言語に対応した防災システム、ピクトグラム、音声サイン等の活用や、避難ルートの設定等、外国人、高齢者、障がい者を含むすべての来場者が安全に避難できる体制を構築する。

非常用電源確保による大規模災害等発生時の機能維持

地震や台風等の大規模災害等発生時にも、会場の安全確保や避難誘導をはじめ、来場者の安全を図ることができるよう非常用電源を整備し、停電による機能停止を防ぐ。

帰宅困難者発生時に対応できる収容施設・備蓄の確保

災害発生時等に一定の期間、会場内に滞在しなければならないことを想定し、会場施設・パビリオンへの避難者収容方針や必要な備蓄の確保等、ハード・ソフト両面から対応すべき事項を検討し、整備する。

関係者を対象とした研修・訓練の実施

会期前から、万博スタッフ及び参加国等スタッフの責任者等関係者を対象として、災害・事件・事故の予防や発生時の対応について十分な事前教育・訓練を行うとともに、大規模災害等を想定した総合訓練を関係機関と連携して実施し、非常時に適切な対応が実行されるよう準備する。

医療・救急・衛生

けが人や病人が発生した場合に迅速な対応が可能な体制を構築する。このため、応急処置機能、診療機能を有する施設や、救急搬送のための拠点を整備する。警備・セキュリティ、消防・防災、危機管理のための拠点とも連携しながら必要な機能・体制を確保する。このための具体的な計画を作成し、必要な措置を講じる。

会場内での救急救護・急性期対応

けが人や病人が発生した場合の救急救護・搬送体制（ヘリコプターによる搬送を含む）を構築するとともに、会場内で急性期対応を迅速にできるように診療所・応急手当所を適切に配置し、緊急車両の動線を確保する。また、万博スタッフ及び参加国等スタッフに対して、事故対応や救急救命等のトレーニングを実施し、緊急時の初動対応が取られるようにする。

公衆衛生・保健

適切な屋根の配置、給水ポイント、ドライミストの配置等による熱中症対策や、手洗い場所や消毒用アルコールの配置等による感染症対策及び食中毒対策を講じる。

清掃・ごみ管理

来場者が会場内で快適な時間を過ごすための美観維持と、環境負荷を軽減し、SDGsを体現する万博会場づくりにも寄与するために、会場内清掃とごみの管理を適切に行う。このための清掃計画を策定し、会場内の具体的なごみ管理・回収のための体制確保に必要な措置を講じる。

3Rの推進

3R（Reduce、Reuse、Recycle）に基づき、会場内のごみの管理を実施する。

営業施設等での簡易包装や再生可能包装材の使用等の検討、来場者へのマイバッグ利用の呼びかけ、正しい分別の推進等により、会場内での3Rの推進を図る。

会場内の清潔な環境の維持

来場者が快適に過ごせるよう、会場内の清掃を適切に実施するとともに、会場内でごみがポイ捨てされることのないよう、一定の間隔でごみ箱を配置する。特に、多くの人が往来する場所や飲食施設の周辺には、ごみの発生量に見合うようにごみ箱を適切に配置する。

また、ごみ箱を配置する際には、清掃の際のサブストックヤード・メインストックヤードへのごみの回収・排出の流れに沿って計画するほか、清潔感を損なわないよう景観に十分配慮する。さらに、清掃・ごみ運搬におけるロボットの活用を検討する。

通関・保税

外国貨物の通関、保税のために必要な措置を講じるとともに、円滑な万博事業の運営に必要な物品搬出入が行われるよう、関係主体との連携のもと、物流に関する具体的な計画を策定する。

外国貨物の輸送・展示・保管及び会期後の出展国への返送に対応するため、会場全体が保税地域となるよう調整を行うほか、輸出入通関に迅速に対応できるよう取り組む。

会場内物流

会場への外部からの物品搬入や、会場からのごみの搬出に関しては、来場者の移動動線との輻輳を回避するとともに、搬出入可能時間帯を考慮する。また、それに合わせてバックヤード、倉庫を適切に配置する。

ICTを活用し、輸送や備蓄を最適化し効率的な会場運営を実現するとともに、会場内物流におけるロボットの活用を検討する。

保険

主催者及び参加者は、関係者が安心して万博事業に従事できるよう、労働者災害補償保険や社会保険のほか、第三者への損害賠償責任を補償する保険等に加入する。

また、主催者及び参加者は、不正行為があった場合を除き、相手方当事者に対する損害賠償請求権を相互に放棄することが大阪・関西万博の一般規則で規定されていることから、自らが管理するパビリオン・展示物の財物損害を補償する保険についても適切に加入する。

6.6 持続可能性に配慮した運営

大阪・関西万博は、その運営においてもSDGs達成を実現するため、環境や社会への影響を適切に管理し、持続可能な万博の運営を目指す。

サステナブルな万博運営

会期前の計画段階から会期中、会期後にわたり、脱炭素社会の構築や循環型社会の形成、自然との共生や快適な環境の確保に取り組み、サステナブルな万博運営を実現する。

省CO_2・省エネルギー技術の導入や再生可能エネルギー等の活用により、温室効果ガスの排出抑制に取り組むとともに、リサイクル素材やリユース・リサイクル可能な部材を積極的に活用する等3Rに取り組み、資源の有効利用を図る。

インクルーシブな万博運営

大阪・関西万博は世界各国、また多様な人々の協力により成立する事業である。来場者やスタッフを含む参加者において多種多様な人々が積極的に、また安心して参加できる環境を整えるとともに、本万博からテーマに基づく多様な考え方を発信できるよう、インクルーシブな万博運営を実現する。

万博運営において幅広い参加機会を提供することや、大阪・関西万博に携わるスタッフの就業環境の整備等、参加者一人一人を尊重した万博運営を目指す。

加えて、万博会場ではテーマに基づき、いのちや食、学び等の多様な価値が創出されるよう取り組むことで、SDGsの達成に貢献する。

持続可能性管理システム（ESMS）

大阪・関西万博は、ISO20121[11]への適合を視野に入れて、イベントの持続可能性を管理するシステム（Event Sustainability Management System, ESMS）の導入を検討する。

11 イベント運営における環境影響の管理に加えて、その経済的、社会的影響についても管理することで、イベントの持続可能性をサポートするためのマネジメントシステム（ESMS:Event Sustainability Manegement System）の国際標準規格。

7

第7章 情報通信計画

7.1 情報通信計画の基本方針

大阪・関西万博では、世界から多くの人の参加を促し、また、未来社会の一端を体験できる会場となるよう、情報通信技術（ICT）や情報通信サービスを効果的に活用していく。

来場者の利便性や快適性の向上

大阪・関西万博への来場から参加後までシームレスなサービスの提供により、来場者の利便性や快適性の向上を図る。

具体的には、入場券の購入や会場までの移動、会場内の案内や施設の予約等についてICTの活用により利便性を高める。

会場運営の効率化と安全性の確保

効率的な会場運営を実現するとともに、会場の安全性を確保するため、必要となるICTを導入する。

具体的には、会場案内やエネルギー、清掃、スタッフ管理、セキュリティ、防災等の分野でICTを効果的に活用していく。

多様な参加と得られたデータの社会還元

大阪・関西万博への多様な参加を促すため、会場での参加のみならずバーチャル万博への参加等、ICTを活用し、様々な参加の方法を用意する。

また、大阪・関西万博への参加体験を通じて生まれた多様な成果や情報はビッグデータとして適切に管理し、顧客サービスやより良い運営への活用を行う。さらに、こうして得られた知見を社会に還元することで、本万博のレガシーとして未来に継承する。

セキュリティの確保

大阪・関西万博では、様々な情報をデータ化し取り扱うことになるため、情報セキュリティを確保し、安全で安心な万博の運営を実現する。

そのため、取り扱う多様な情報について、利用や管理の方針を示したセキュリティガイドラインを定め、情報を取り扱う出展者やサービス提供者も含めこれを遵守するように求める。

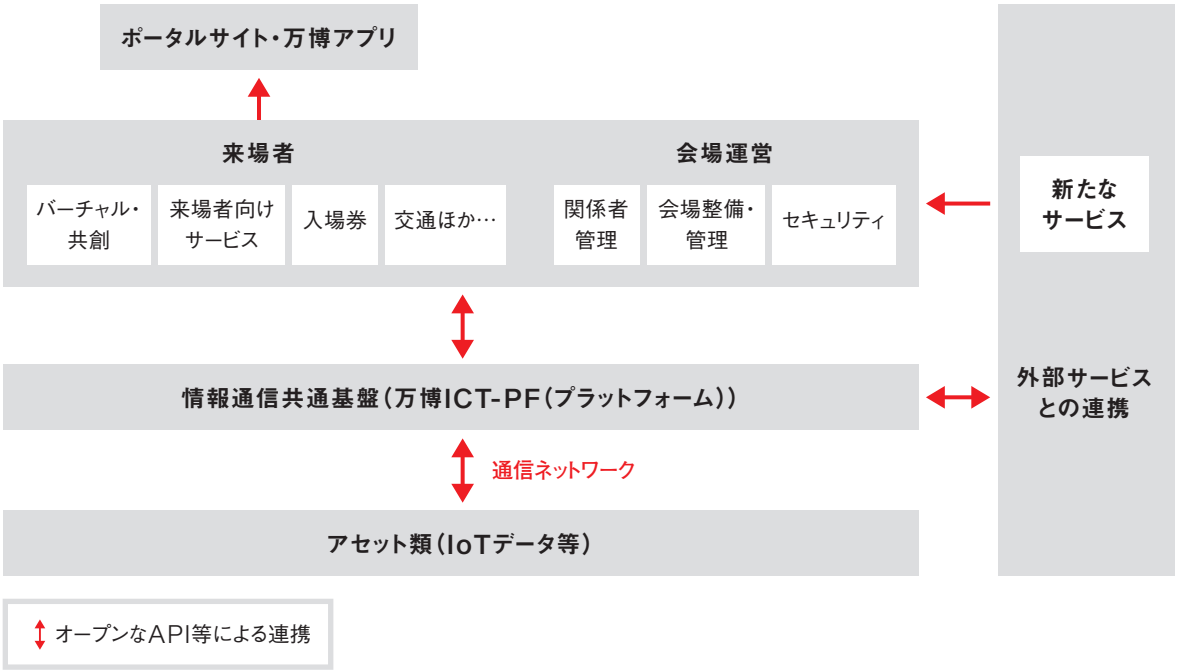


図　アーキテクチャ概念図

※2020年12月時点での想定であり、今後の検討により変わりうる。

情報通信共通基盤の整備

情報通信計画の基本方針を実現するため、情報通信共通基盤（万博ICT-PF（プラットフォーム））を整備する。

これは、大阪・関西万博に導入される様々なサービスを繋ぎ来場者の利便性を高める役割を果たすとともに、会場運営を最適化し、効率的なサービスの提供を可能とするものである。

具体的には、来場者に割り当てた個別のIDを万博ICT-PFを介してほかの機能に共有することにより、入場券購入から来場、入場、場内移動、退場及び帰宅に至る一連の来場者のニーズに対して、連続的かつ一体的にサービスの提供を行うとともに、これらの情報に基づき効率的な会場運営を行う。

拡張性あるオープンな機能によるイノベーションの促進

万博ICT-PFは、新たなサービスの追加や外部のサービスとの連携が容易となるような拡張性を備えたシステムとする。具体的には会期中にオープンなアプリケーションプログラミングインターフェース（API）を公開することで、国内外の様々な自治体や企業・団体等のサービスを追加・拡充できるようなプラットフォームとなるよう整備を進める。2019年12月に大阪府・市・経済界にて策定した「夢洲まちづくり基本方針」にて掲げた「万博の理念を継承したまちづくり」等の活動も参考にしながら、今後具体化していく。

万博ICT-PF（プラットフォーム）の整備により実現が期待されるサービス例

万博ICT-PFの整備により、企業や自治体等の外部のサービスと連携することで、次に挙げるような新たな来場者向けのサービス提供も可能となる。

- 主催者と外部団体（交通事業者等）が連携して、自宅からの来場や、会場内輸送・サービスをシームレスに繋ぎ提供する。
- 来場前に登録した情報をもとに、主催者が来場者にその志向に合った回遊ルートや案内をリコメンドする。例えば、来場者の同意に基づき、食事情報（アレルギーや宗教上食べることができない食材等）を登録することで、レストランサービスと連携し、最適な食事メニューを提供する。
- 地元自治体等の地域の観光、エンターテイメントや飲食店等の外部サービスとの連携を行う。

情報通信ネットワークの整備

5Gを含めた情報通信インフラを会場に整備し、アーキテクチャ概念図にあるような機能とサービスを実現する。

また、有事に備え、必要なバックアップ体制を構築するとともに、セキュリティレベルの高い情報通信ネットワークを整備する。

7.2 情報セキュリティ方針

大阪・関西万博では、来場者の情報や会場の管理情報等、高いセキュリティが求められる情報を取り扱う。そのため主催者として、情報セキュリティの管理や運用の体制を整え、情報の利用方針や管理方針、手順等を示した情報セキュリティ規程を定め、運用する。併せて可用性、完全性にも配慮したバランスの良いセキュリティマネジメントを行う。

また、データの利活用を促進するにあたり、データの適切な利用許諾、利用ルール等も情報セキュリティ規程に定め、主催者、出展者、情報サービス提供者にもこれの遵守を求める。

データ流通のリスク対策

用途に応じた適切な利用許諾	データ管理の責任範囲の明確化	利用データの範囲を限定
ユーザーが意図しないデータの利用を防止	データオーナーシップ（データの利用権限者）との責任範囲を契約で定義	個人情報保護法等関連法規を遵守した運用 個人データの匿名化

8

第8章 輸送計画

8.1 基本方針

大阪・関西万博の想定来場者数2,820万人の円滑な来場を実現するために、鉄道・道路・海路・空路等の既存交通インフラを最大限活用したアクセスルートを計画する。各アクセスルートのバランスのとれた利用を図るため、ICTを活用し、各種誘導施策を展開するとともに、適切なルートや混雑状況等の情報を提供する。

また、大阪府内の企業へ時差出勤やテレワークの活用を呼びかけ、ピーク時間帯の交通負荷の軽減を図るとともに、鉄道やシャトルバスへの乗換が安全・円滑にできるよう、MaaS等の新しい技術を積極的に取り入れながら、関係機関・事業者等と連携して混雑の解消に取り組む。

鉄道

大阪メトロ中央線のコスモスクエア駅から会場となる夢洲に鉄道（北港テクノポート線）が延伸され、新たな駅が建設される予定であり、これらが主な公共交通ルートとなる。なお、大阪・関西万博会期中にはこれらの鉄道の輸送力が増強される。

自動車

一般の自家用車については、会場から概ね15km圏内に設ける会場外駐車場でバスに乗り換えるパークアンドライド方式を採用し、夢洲への乗り入れは、原則として禁止とする。なお、会場となる夢洲には、団体バスや障がい者専用の駐車場、シャトルバス、パークアンドライドバス及びタクシーの乗降空間となる交通ターミナルを設ける。

効率的な駐車場及び交通ターミナル運用の観点から、団体バス及び自家用車（障がい者利用車両含む）の駐車場等の利用については、原則として事前予約制とする。

シャトルバス（主要駅・空港）

鉄道主要駅及び空港から万博会場まで直通で運行するシャトルバスを設ける。シャトルバス乗降場は、会場西ゲートに隣接する交通ターミナルに設ける。

海路・空路

会場が島というロケーションを活かして、船によるアクセスの導入も検討する。旅客の乗降場は夢洲の北側エリアに設けることを検討する。

ナショナルデー、スペシャルデー等で万博会場を訪れる海外の賓客が関西国際空港や神戸空港を利用する場合も、船やヘリコプター等海路及び空路でのアクセスを検討する。

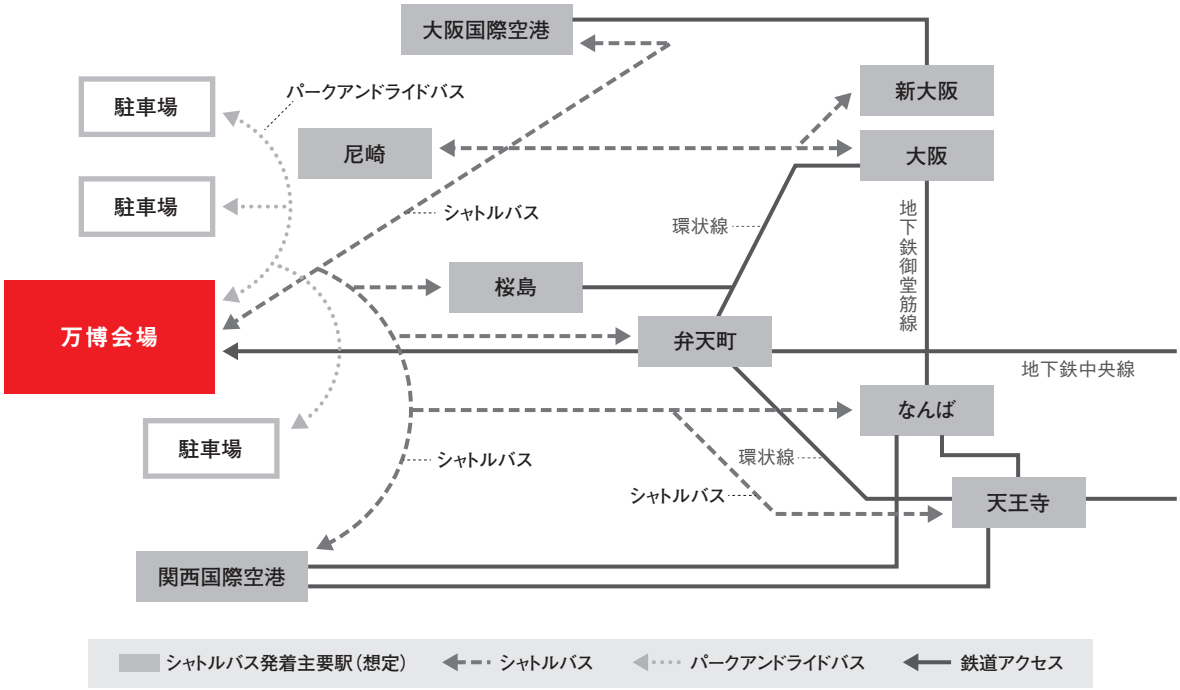


図　会場へのアクセスルート

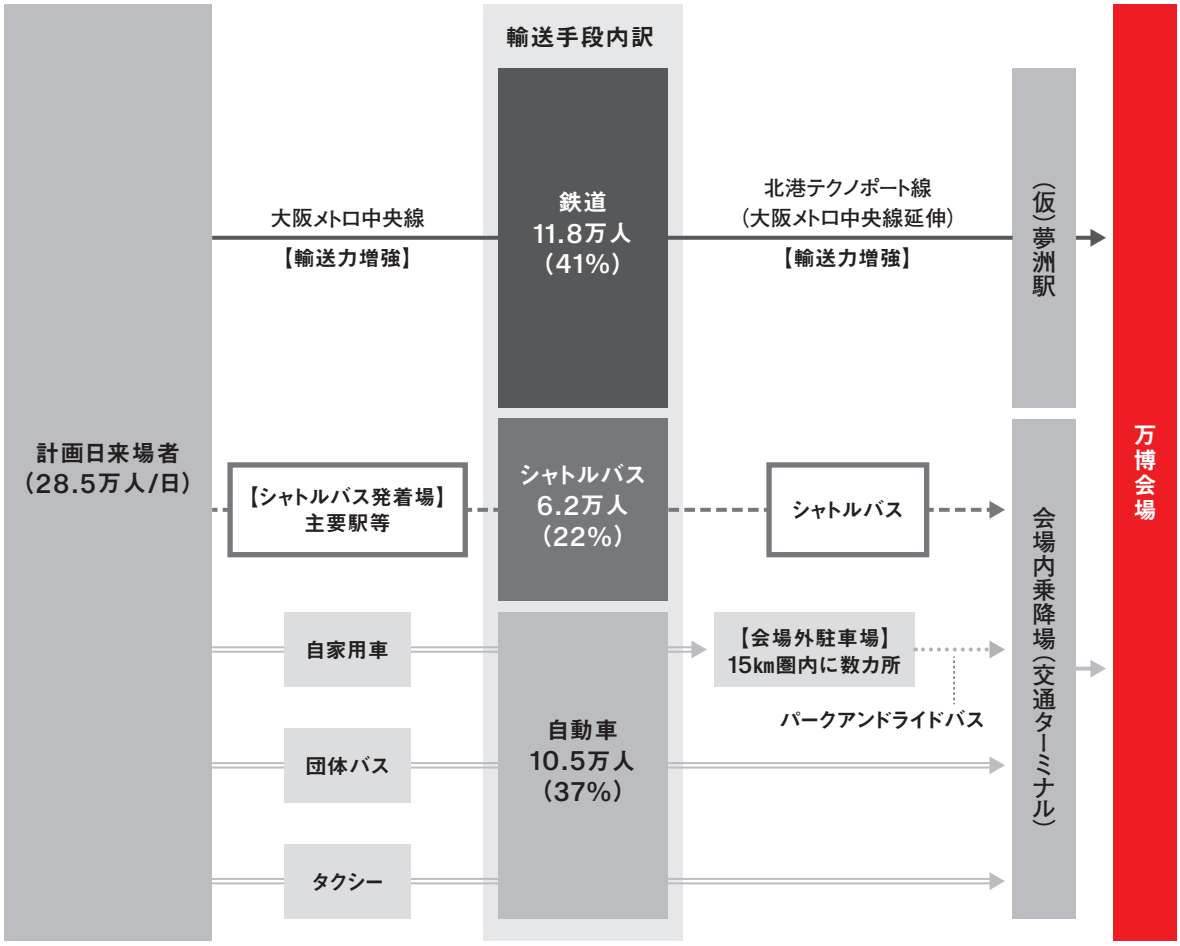


図　輸送手段別想定来場者数

9

第9章　広報・プロモーション計画

9.1 広報・プロモーションの目的

広報・プロモーションの目的は、国内外の様々な人々、国・自治体・企業・団体等の多様なステークホルダーに、①大阪・関西万博への興味や関心を持ち、②参加意欲を高めてもらい、③万博会場への出展、来場へと繋げていき、そして、④会期前及び会期中に創出されたレガシーを伝え、後世に継承していくことである。

そのため、大阪・関西万博の開催意義や魅力を効果的に訴求していく広報・プロモーションを実施する。

広報・プロモーションの方針

広報・プロモーション活動は、会期前から会期中、会期後までを5つのフェーズに分け展開していく。ターゲットとなるステークホルダーの特性、大阪・関西万博を取り巻く外部環境やメディアの状況の変化に対応しながら、効果的かつ効率的に進める。

そのために、大阪・関西万博開催の目的や魅力に関する情報を発信し多くの人の関心を呼び、テーマに触れる機会を積極的に提供していく。また、デジタル技術が世界を変革した時代の万博であるため、公式Webサイトや公式SNS等、本万博が運営するメディアに加え、個人のSNSといったインターネット上のコミュニティにより情報が伝播していくことで、ステークホルダーが本万博に関わりたくなるよう、情報発信を積極的に展開していく。

本活動についてはフェーズごとに取組内容と成果の評価を行い、次のフェーズではより効果的な活動を実践していく。

広報・プロモーションの対象

広報・プロモーションのターゲットは、大阪・関西万博の来場者だけではなく、本万博を創り上げる公式参加者や企業・団体等を含む。

国内では大阪・関西万博への関心や参加意識に地域的な差（関西とその他）や世代の差があること、海外からの出展や来場を促すために知名度を戦略的に上げていく必要がある等、情報を伝えるべき相手の特性を踏まえた上で活動する必要がある。

国内外のメディアと連携して積極的に情報発信を行うとともに、大阪・関西万博に関わる全ての人々が、個々のメディアを持っているという認識のもと、情報が分散的に伝播していくということも考慮して、広報・プロモーションを展開する。

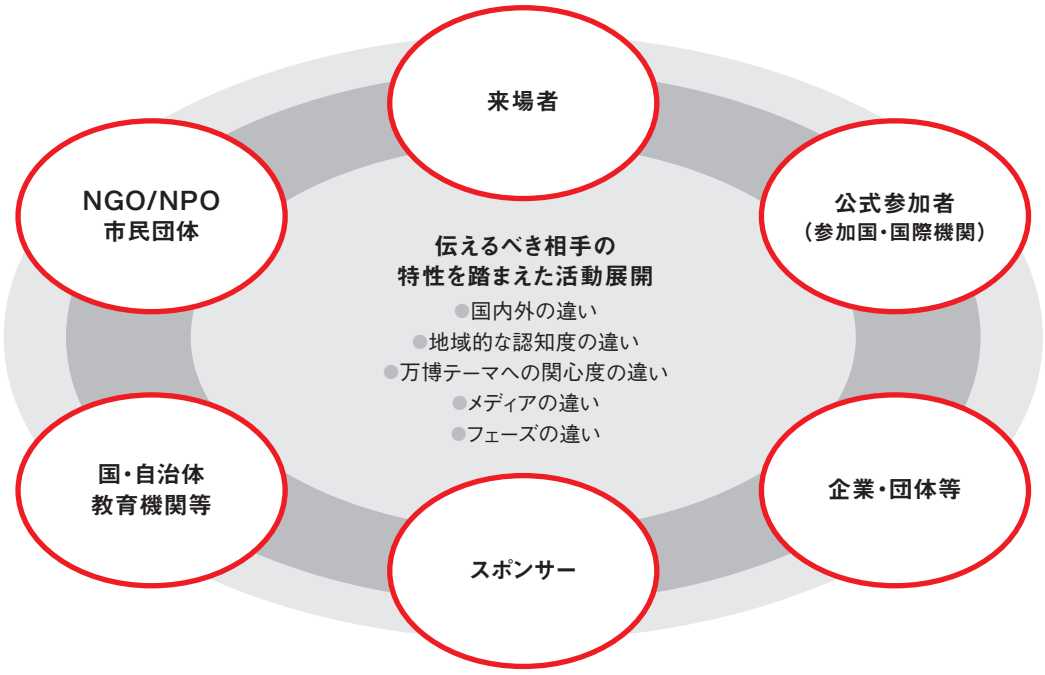


図　広報・プロモーション活動のターゲット

活動計画

会期前から会期中、会期後までを以下のように5つのフェーズに分け、広報・プロモーション活動を展開する。

フェーズ1（2022年4月まで）

大阪・関西万博の開催に向けて計画の具体化が進められていく。2021年度には、会場計画が詳細化し、本万博の全容が具体化される。

こうした情報を積極的に発信し、日本全体に大阪・関西万博の認知と期待感を拡げていく。

企業・団体、NGO/NPOや市民団体等に向けては、大阪・関西万博の多様な参加方式を提示することで参加意欲を醸成していく。

海外に向けては、BIE総会での発信、各国大使向けのイベントの開催及び2021年に開催される2020年ドバイ国際博覧会（ドバイ万博）を活用した参加招請を行い、大阪・関西万博の情報を積極的に発信する。

「TEAM EXPO 2025」プログラムでは、共創パートナーや共創チャレンジの募集を開始し、多様な主体の同事業への参加を進めるとともに、これらの取組をテーマフォーラム等の機会を活用して発信していく。

フェーズ2（2022年4月から2024年10月まで）

会場建設着手や大阪・関西万博への参加表明の時期であり、本万博の輪郭が見えてくるため、より具体的な情報を用いたコンテンツを制作し、期待感を高めていく。

また、開会2年前程度のタイミングで入場券販売の開始が予定されていることから、前売販売を一つの契機として、積極的に広報・プロモーションを進める。

海外に向けては、BIE総会、参加国会合（IPM）、登録・認定博覧会等の機会を活用し、参加国や国際機関等に向けて大阪・関西万博の魅力や開催準備情報を積極的に発信する。

「TEAM EXPO 2025」プログラムでは、国内外で多くの共創の機会を創出すると同時に、ベストプラクティスの選定等を通じ機運醸成を図る。これらの動きはテーマフォーラム等の機会を活用してオンライン及びリアルの場で発信し、大きな巻き込みを生み出していく。

フェーズ3（2024年10月から2025年3月まで）

開会まで1年を切り、会場や展示・体験のコンテンツ等が具体化している。

出展者や関係団体等からの情報発信も増えている。

各種イベントの開催やコンテンツを活用して情報発信を最大化し、大阪・関西のみならず日本全国からの来場意欲を促進し、入場券販売に繋げる。

海外に向けては、公式参加者が確定している時期であるため、参加に対する感謝を様々な形で発信しながら、来場促進に向けた広報・プロモーション活動を展開する。特に開催までの1年間を重視し、プロモーション活動を重点的に行う。また、公式参加者のパビリオン建設や出展、運営にかかる準備が始まっており、会期前から会期中を通して、海外だけでなく日本国内で準備にあたる外国人スタッフ等にも配慮した情報提供を行う。

「TEAM EXPO 2025」プログラムでは、会期中の発信に向けたプロモーションを進めるとともに、来場への機運醸成を図る取組を進める。

フェーズ4（2025年3月から会期中及び閉会まで）

来場促進やリピート獲得に向けた広報・プロモーション活動を展開する。会場の様子や催事情報を公式Webサイトや公式SNS等でリアルタイムに情報発信することで、来場に向けた関心を高めていく。

同時にマスメディアと連携して、来場者の体験の感想等、リアルタイムな情報を発信していく。

海外の来場促進に向けては、観光事業者等とも連携し集客を図る。併せて会期中、各国ナショナルデー等で訪問する各国政府代表者等に対して、大阪・関西万博並びに国内の観光、文化の魅力等について積極的な情報発信を行う。

「TEAM EXPO 2025」プログラムでは、会場内（ベストプラクティスエリア）はもちろん、会場外の大阪・関西広域エリア等のイベントやオンライン上においてもベストプラクティスを中心に「TEAM EXPO 2025」プログラムの優れた活動を広く紹介・発信し、多くの人の大阪・関西万博への関心及び来場意欲を高める。

フェーズ5（閉会後）

大阪・関西万博の閉会後は、その成果を広く世界に公表するとともに、参加に対して感謝を伝えていく。

日本のみならず世界で大阪・関西万博のテーマが実践されていくことを目的として、本万博を通じて生まれた様々な成果（レガシー）を後世に継承する。

海外に向けては、大阪・関西万博閉会後のBIE総会等で本万博の成果に関する情報や感謝メッセージを発信する。

「TEAM EXPO 2025」プログラムにおいては、それぞれの活動や仕組み、テーマフォーラムで議論された内容等をレガシーとして継承していく。

9.2 広報活動

広報活動は、2025年日本国際博覧会協会（博覧会協会）のメディアやマスメディアと連携した情報発信を行う。

博覧会協会による情報発信

コンテンツや機会を活用した情報発信

大阪・関西万博のより具体的な計画の公表、ロゴマークやキャラクターの決定等、話題にのぼる出来事や決定がなされるタイミングを狙い、ニュースリリース等により、広く情報を発信していく。

デジタルメディアの活用（公式Webサイト、公式SNS等）

公式Webサイトは、大阪・関西万博の情報を発信する基盤となるため、本万博の概要を魅力的に伝えていく。また、世界への情報発信のため、日本語、英語、フランス語等の多言語化を進める。

公式SNSは、最新情報やトピックスに厳選して情報を発信していく。対話性や拡散性が高いという特徴を活かし、大阪・関西万博への関心が高い層へ働きかけ、更なる情報発信を進める。

BIE総会や参加国会合（IPM）等の機会の活用

BIE総会、IPMやドバイ万博、国際会議等の機会を活用し、海外に向けて、参加招請を行うとともに、大阪・関西万博の情報を積極的に発信する。

マスメディアと連携した情報発信

プレスリリース・プレスカンファレンスの実施

会期直前のメディア関係者向け現地視察会の実施や、プレスリリースを通じて、マスメディアが活用可能な情報を積極的に発信していく。

また、記者会見やプレスカンファレンスを定期的に実施し、マスメディアとの信頼関係を構築することにより、大阪・関西万博のテーマやテーマを実現するための取組を伝えていく。

プレスセンターの整備

大阪・関西万博の最新の情報をタイムリーに発信するため、国内外のマスメディアが常駐し、情報発信を行っていくプレスセンターの会場内整備を検討する。

9.3 プロモーション活動

プロモーション活動は、大阪・関西万博のマイルストーンに従い、伝えるべき情報と手段を適切に選びながら展開する。

プロモーション促進ツールの開発と管理

大阪・関西万博のイメージの浸透

大阪・関西万博のテーマや魅力を広く伝えることができるよう、シンボルやデザイン（ビジュアル・アイデンティティ）の開発とその管理等を行う。

- ●公式ロゴマーク、ロックアップロゴマーク
- ●公式キャラクター
- ●タレント、文化人等の公式アンバサダー、スペシャルサポーター等

●公式ロゴマーク

OSAKA, KANSAI, JAPAN
EXPO 2025

●ロックアップロゴマーク

OSAKA, KANSAI, JAPAN EXPO 2025 | WORLD EXPO

OSAKA, KANSAI, JAPAN EXPO 2025 | Bureau International des Expositions

プロモーションコンテンツ制作

大阪・関西万博の認知度を高めるため、一般に広く配布可能なパンフレットやガイドブック、広報誌、公式の会合の場でプレゼンテーションを行うためのコンテンツ、メディアが活用可能なコンテンツ等、ターゲットに合わせて活用可能なプロモーションコンテンツを制作する。

認知度向上に向けたイベント及び広告展開

イベントの主催

本計画のフェーズを意識するとともに、開催までの節目となるタイミングにイベントを計画的に展開する。

イベント参加や団体・機関等との連携による情報発信

大阪・関西万博のテーマと関連の深い国内・国際会議等でのプロモーションや国内外の大規模イベントへの参加・出展等により、認知度を高め、参加を促進する。大阪・関西地域だけでも、ワールドマスターズゲームズ2021関西等、多くの大規模なスポーツイベントや文化イベントが開催される。こうしたイベント等を積極的な情報発信の場として活用する。

大阪・関西や東京、その他国内地域で各地のメディアや経済団体と連携したシンポジウムの開催、教育機関と連携した、小中学校で大阪・関西万博のテーマやSDGsの理解促進等について考え行動を促すような教育機会の提供、在外公館・団体等との連携による海外への情報発信に取り組む。また、観光関連事業者との連携による旅行を通じた国内外への情報発信にも取り組んでいく。

広告の展開

テレビCM、ラジオCM、新聞広告及び雑誌広告といったマス広告やインターネット広告もプロモーション活動においては重要となってくる。広告は短期間で多くの人々へ訴求ができるため、会期直前の盛り上がりがピークを迎えるタイミングで広告を積極的に展開することで、入場券販売に繋げていく。また、会期中においても集客状況を鑑みながら、広告を定期的に展開して、来場促進を狙っていく。

加えて、会期前における周年や節目のタイミングでも、広告を展開し、大阪・関西万博への興味を抱かせ、将来的な来場促進へと繋げていく。

10

第10章 資金計画

10.1 資金計画

大阪・関西万博の資金計画は、以下のとおりを見込む。

収入（億円）		支出（億円）	
国庫補助金収入	617	会場建設費	
大阪府・大阪市補助金収入	617	施設整備費	1,180
民間資金等収入	617	基盤・インフラ整備費	670
計	1,850	計	1,850
入場券売上	702	運営費	809
その他収入	107		
計	809		
収入計	2,659	支出計	2,659

※端数処理のため合計額が一致しないことがある。
※会場建設費は、最大の額として1,850億円を計上している。

11

第11章　事業推進計画

11.1 リスク管理

万博の開催は、大規模な会場建設、世界各国の参加招請、6ヵ月間の会場運営等、多種多様な事業が密接に関係しながら並行した総合的な事業である。そのため、万博という幅広い事業領域には多様なリスクも潜んでおり、それぞれのリスクは互いに密接に関連している。

これに対し、約2,820万人の来場者や各国からの参加者の安全を確保し、安心して参加できる万博を実現するため、大阪・関西万博の事業推進においては、リスクマネジメントの考え方に基づき、早期からリスクを洗い出し、その顕在化の抑制に取り組んでいく。

また、自然災害等のリスクが顕在化し、万博事業の推進が困難となるような危機的事態の発生に備えて、来場者・参加者の安全を守り、被害を最小限に留められるよう総合的な危機管理にも取り組んでいく。

会期前の事業リスク管理

博覧会協会内にリスク管理の実施体制を設け、予見されるリスクを網羅的に洗い出す。管理対象とするリスク、危機につながる重大なリスクを明確にし、関連する外部機関と連携しながら、開催まで継続的にリスクの予兆を捉え、リスクの顕在化を抑制する対策を講じる。

会期中の事業リスク管理

会期中の会場運営管理に関わる博覧会協会内組織と業務委託先機関を含めたリスク管理の実施体制を整備し、会期中のリスクの予兆把握と顕在化防止に努める。

並行して、事故等の発生時の連絡・報告・判断を円滑に行う仕組みを整備することで、迅速な対応を図る。

リスク顕在化時への対応（危機管理）

自然災害やテロ（サイバーテロを含む）等の重大なリスクが顕在し、万博事業の遂行に危機的事態が発生した場合に備え、そのような非常時に対応を総合的に判断・指揮できる体制の準備を進めていく。国家的・国際的事業の存続に関わる状況にも対応するため、博覧会協会、政府、地元自治体、関係機関、民間企業等が連携する実行性の高い体制を整備する。

感染症対策

感染症対策については、2021年に開催される2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会、ドバイ万博等大規模イベントでの感染症対策を参考に必要な対策を講じる。また、感染症対策検討会議を設置し、会期前から閉会までその時々に応じた多角的な感染症対策について、専門家の意見を踏まえ必要な検討を行う。

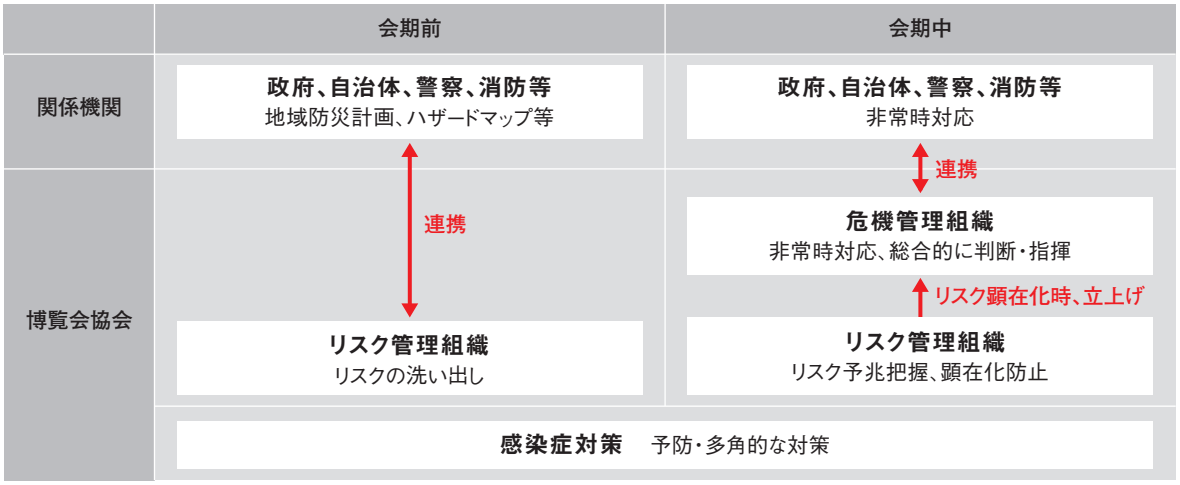


図　リスク管理体制

11.2 推進体制

2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）は、2018年11月に開催された博覧会国際事務局（BIE）の総会において、2025年の開催が承認された国際博覧会である。

この主催者である「公益社団法人2025年日本国際博覧会協会（博覧会協会）」は、「平成三十七年に開催される国際博覧会の準備及び運営のために必要な特別措置に関する法律」（平成31年法律第18号）（2019年5月23日施行）に基づき、政府により指定された。

博覧会協会は、大阪・関西万博の成功に向けて、博覧会政府代表、国際博覧会推進本部、関係省庁、大阪府・大阪市、経済界、関西広域連合、警察・消防等関係行政機関、教育・研究機関等と協力し、経済産業省の監督の下、事業を推進していく。

事業推進に向けて、専門知識や経験等に基づき助言する役割を持つ「シニアアドバイザー」を設置し重要課題に備えるとともに、「プロデューサー」を配置し、会場デザイン、会場運営及びテーマ事業の各領域の事業を具体化していく。

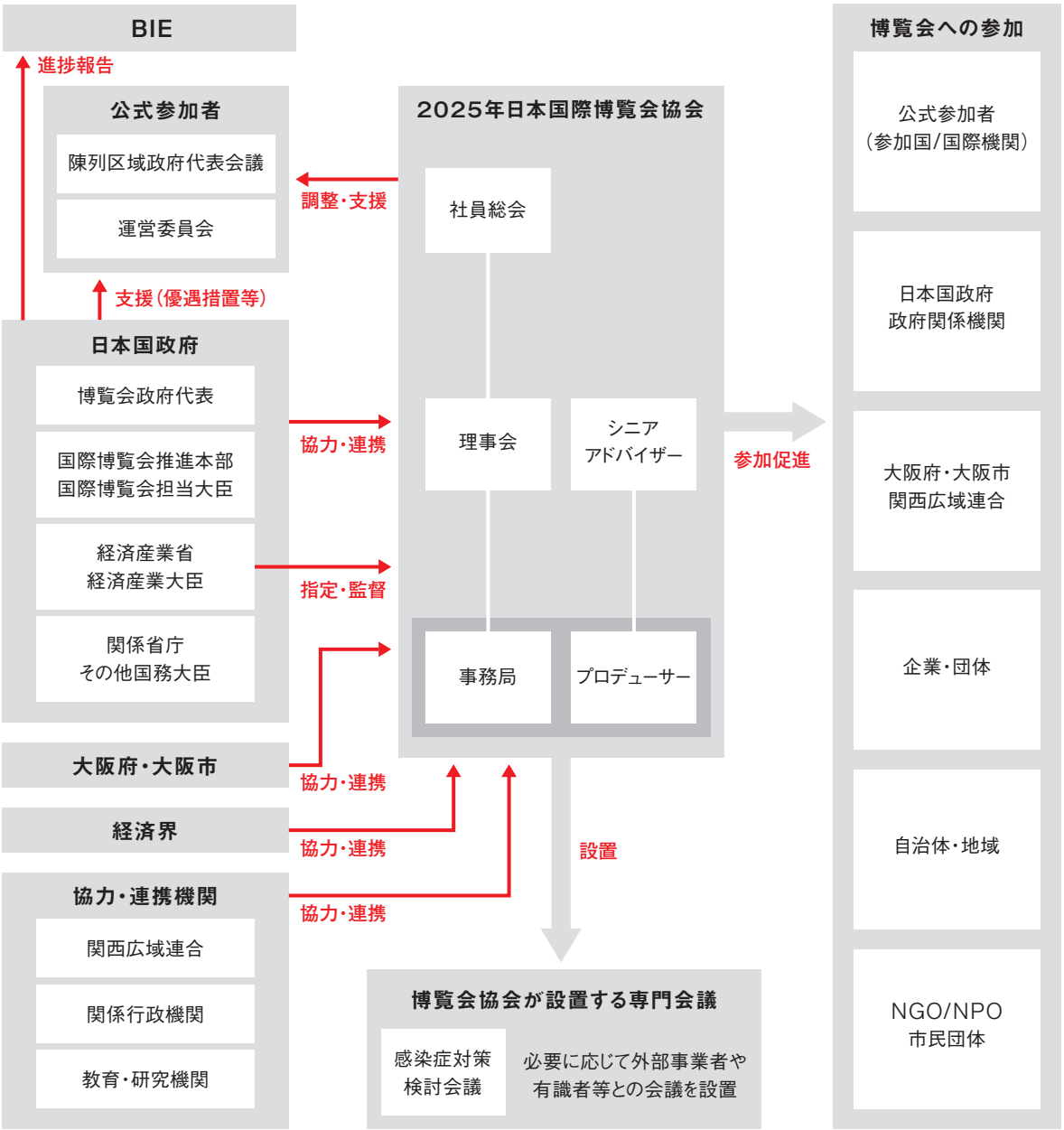
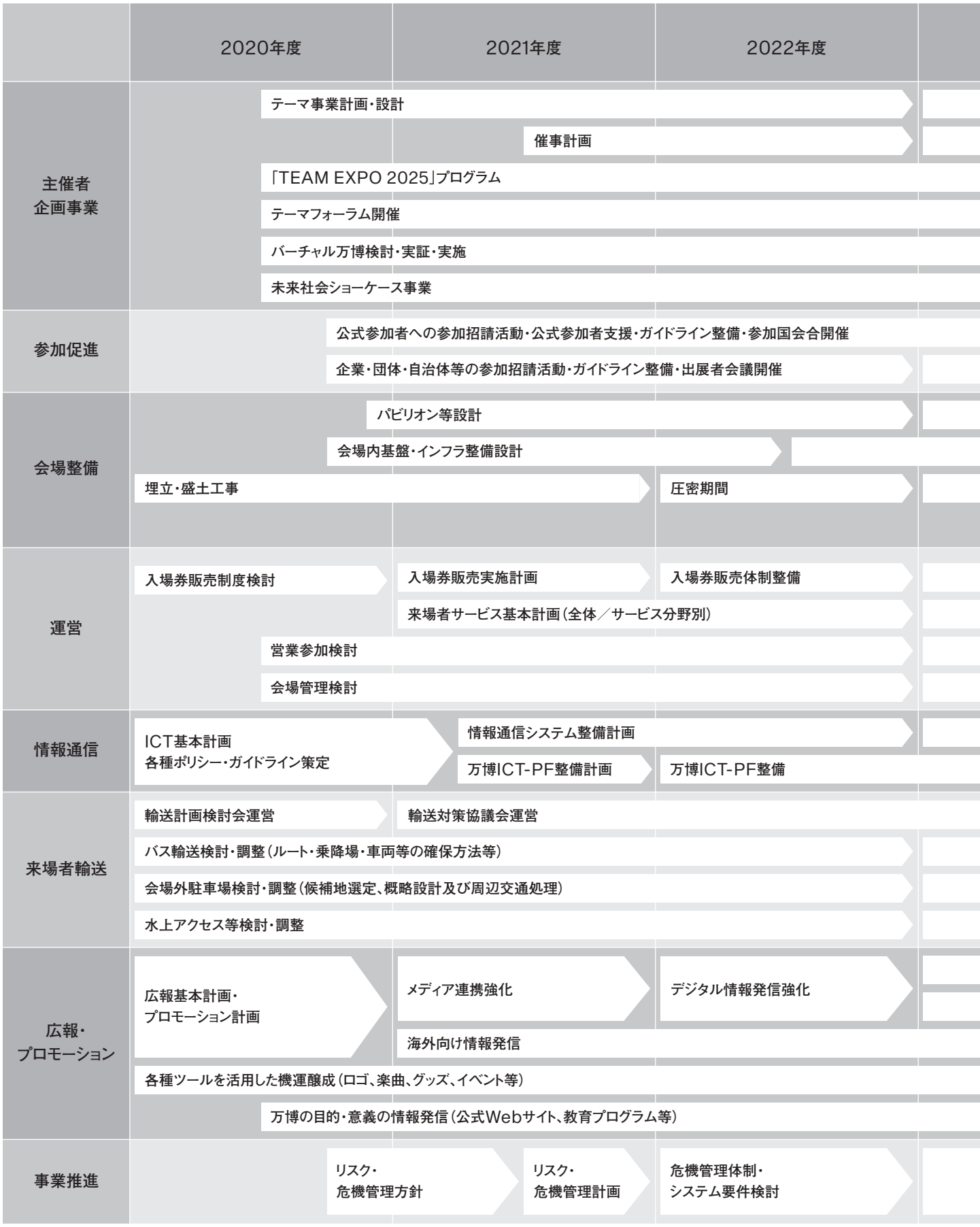
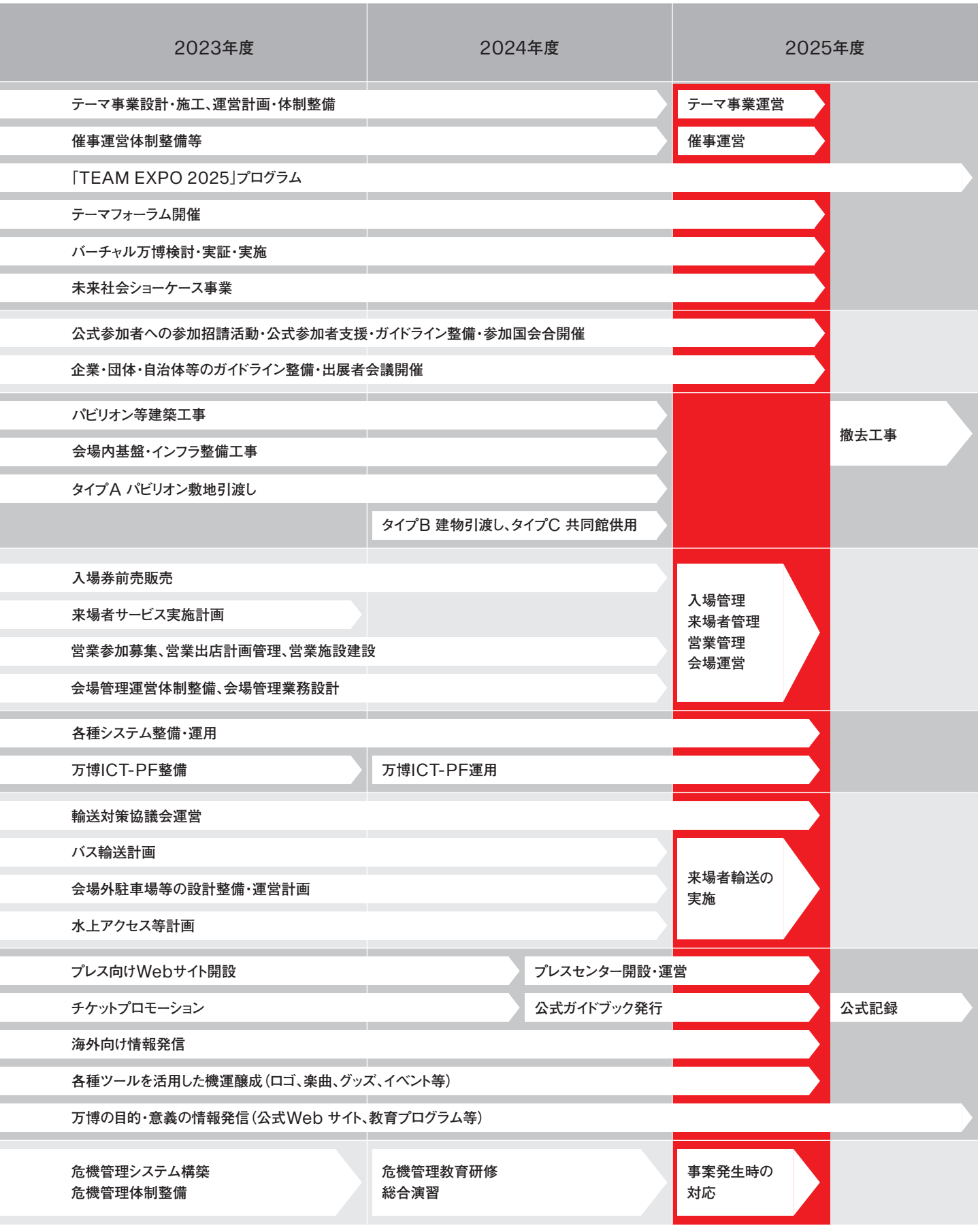


図　推進体制

11.3 スケジュール


2020年度
2021年度
2022年度
主催者企画事業
テーマ事業計画・設計
催事計画
「TEAM EXPO 2025」プログラム
テーマフォーラム開催
バーチャル万博検討・実証・実施
未来社会ショーケース事業
参加促進
公式参加者への参加招請活動・公式参加者支援・ガイドライン整備・参加国会合開催
企業・団体・自治体等の参加招請活動・ガイドライン整備・出展者会議開催
会場整備
パビリオン等設計
会場内基盤・インフラ整備設計
埋立・盛土工事
圧密期間
運営
入場券販売制度検討
入場券販売実施計画
入場券販売体制整備
来場者サービス基本計画（全体／サービス分野別）
営業参加検討
会場管理検討
情報通信
ICT基本計画
各種ポリシー・ガイドライン策定
情報通信システム整備計画
万博ICT-PF整備計画
万博ICT-PF整備
来場者輸送
輸送計画検討会運営
輸送対策協議会運営
バス輸送検討・調整（ルート・乗降場・車両等の確保方法等）
会場外駐車場検討・調整（候補地選定、概略設計及び周辺交通処理）
水上アクセス等検討・調整
広報・プロモーション
広報基本計画・プロモーション計画
メディア連携強化
デジタル情報発信強化
海外向け情報発信
各種ツールを活用した機運醸成（ロゴ、楽曲、グッズ、イベント等）
万博の目的・意義の情報発信（公式Webサイト、教育プログラム等）
事業推進
リスク・危機管理方針
リスク・危機管理計画
危機管理体制・システム要件検討

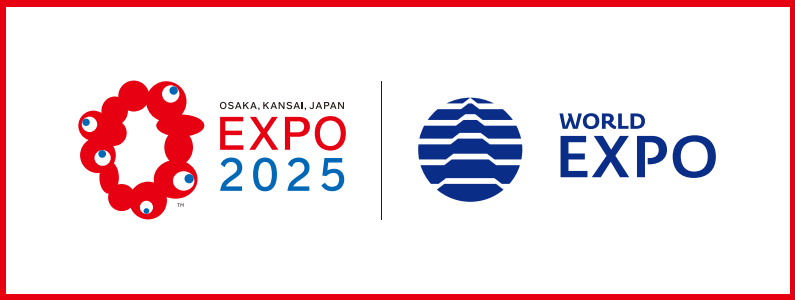


※2020年12月現在の予定であり、今後詳細は検討する。



2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」） 基本計画
2020年12月
公益社団法人2025年日本国際博覧会協会

OSAKA, KANSAI, JAPAN EXPO 2025



2020年12月 公益社団法人2025年日本国際博覧会協会